

水城跡 3

— 第41・42・48・49次・姿見井の調査 —

平成28(2016)年

太宰府市教育委員会

序

本書は、特別史跡水城跡で実施した発掘調査の報告書です。

水城跡は、平成 26 年に築造 1350 年を迎えましたが、長年の風雨や歩行による土塁の傷みに加え、平成 18 年には台風 13 号が直撃し、樹木が倒壊するなどの被害がでました。

今回は、これらの修復工事のほか東門跡周辺環境整備の事前調査を実施しました。調査面積は狭いながらも、土塁の版築の状況や東門周辺の遺構状況など、水城跡を考える上で貴重な成果が得られています。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

結びになりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成 28 年 3 月

太宰府市教育委員会

教育長 木村甚治

例言

1. 本書は太宰府市国分・吉松で行われた水城跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限り G.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 遺構の実測及び写真撮影は担当者のほか柳智子が行った。
4. 遺構の空中写真撮影は南空中写真企画が行った。
5. 出土した鉄製品の保存処理は駒タクトが行った。
6. 遺物の実測は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、山村、宮崎が行った。
7. 表入力・写真整理は瀬戸口みな子、市川晴美、吉村有紀が行った。
8. 遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永亜由子が行った。
9. 遺物の写真撮影は山村が行った。
10. 図の浄書は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、山村、宮崎が行った。
11. 本書に用いた分類は以下のとおり。
 - 須恵器・・・『宮ノ本遺跡Ⅱ 一 窯跡篇一』（太宰府市の文化財第 10 集）1992
 - 土器・・・『大宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財第 7 集）1983
 - 中世須恵器・中世土器研究会編（1995）『概説中世の土器・陶磁器』
 - 陶磁器・・・『大宰府条坊跡Ⅳ』（太宰府市の文化財第 49 集）2000
 - 上田秀夫「14～16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2 1982
 - 森田勉「14～16 世紀の白磁の分類と編年について」『貿易陶磁研究』No. 2 1982
 - 土師質・瓦質土器・・・山村信榮「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』1990
 - 瓦類・・・九州歴史資料館『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』2000
12. 執筆は第 41 次調査を山村信榮、第 42・48・49 次・姿見井の調査を宮崎亮一が行い、編集は宮崎亮一が担当した。

目次

I、遺跡の位置と歴史	4
II、調査体制	5
III、調査および整理方法	6
IV、調査報告	
1、水城跡第41次調査	7
(1) 調査に至る経緯	7
(2) 基本層位	7
(3) 検出遺構	7
(4) 出土遺物	11
(5) 小結	26
2、水城跡第42次調査	30
(1) 調査に至る経緯	30
(2) 調査成果	30
(3) 出土遺物	32
(4) 小結	32
3、水城跡第48次調査	33
(1) 調査に至る経緯と成果	33
4、水城跡第49次調査	34
(1) 調査に至る経緯	34
(2) 調査成果	34
(3) 出土遺物	38
(4) 小結	39
5、姿見井の調査	41
(1) 調査に至る経緯	41
(2) 伝承	41
(3) 検出遺構	43
(4) 出土遺物	44
(5) 環境整備について	44
(6) 小結	47
6、現存する水城跡の礎石について	48
(1) 礎石に関する経緯	48
(2) 水城西門跡横の大石について	53

写真図版・・・主な遺構および遺物写真

附録・・・CD（遺構および遺物写真）

紀年銘	AD	大宰府土器型式	磁器区分	国産陶器型式 (型式の上層)		標識磁器	標準標識器					
				灰輪	緑輪							
⑥	700	I	A	↑	↑	白磁Ⅰ類 越州系青磁Ⅰ、Ⅱ類 長沙系青磁・興輪 褐彩・褐輪	唐三彩・二彩 絞胎					
			B									
	725	II										
	750	III										
		IV										
	800	V	A					猿投0-10 井ヶ谷16-78	長門?・壺内			
	825		B					黒雲K-14	長門・洛北・(洛西)・(黒磁K-14)			
	850	VI	A					羅阿S-4	洛西			
			B					黒磁K-90	黒磁K-90			
		VII	A					↑	↑		青磁褐彩・褐輪 初期イスラム陶器	
900	VIII											
925	IX	A	(A古)	↑								
950		B	(A新)				虎渓山1 (折戸0-53)	近江				
	X			新戸0-53		越州系青磁Ⅲ類 白磁XⅠ類						
1050	XI		B	東山H-72 (丸石Z)								
②	1100	XII	A	↑	↑	白磁Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ1~3、Ⅵ、 Ⅺ、ⅫⅠ類 ⅡⅡ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ類	初期龍泉系・同安系青磁Ⅰ類 越州系青磁 初期高麗青磁Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ類 青白磁					
			B									
		XIII						丸石2 百代寺 東山H-105 羅阿S-1		白磁ⅢⅢ類、統XⅣ類		
	1150	XIV								龍泉系青磁Ⅰ-1~4、6 ⅡⅠ類	白磁ⅢⅣ、Ⅴ-4、ⅡⅢ類増加	
		XV						D		同安系青磁Ⅰ~Ⅳ、ⅡⅢ類	白磁ⅢⅣ、ⅡⅣ-1類	
	1200	XVI	E							龍泉系青磁Ⅱ-a、b類	白磁ⅢⅣ-2類	
	1230		F							龍泉系青磁Ⅲ類 白磁ⅣⅡ類		
	1250	XVII									龍泉系青磁Ⅱ-c類 白磁ⅣⅢ類 黒輪陶器	
	③	1300	XVIII									
		1330	XIX								龍泉系青磁Ⅳ類	
④	1350	XX	G				白磁B、C類 安南鉄輪					
⑦	1450											
⑧	1500											

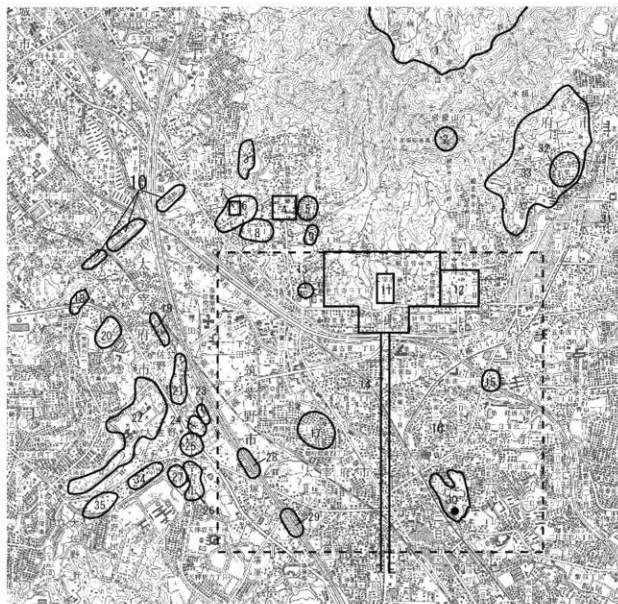
紀年銘資料

- ①A. D. 927 延長5年、大宰府74次S0205A溝
 ②A. D. 1091 寛治5年、平安京左京4条1坊SE9井戸
 ③A. D. 1224 貞応3年、大宰府33次S0605溝
 ④A. D. 1304 寛元2年、大宰府109.111次S03200溝
 ⑤A. D. 1330 元徳2年、大宰府45次S1200池
 ⑥A. D. 784 延暦3年、長岡京102次SD10201溝
 ⑦A. D. 1459・1465 長祿3・寛正5年、福岡市井相田CⅡ・SG16池
 ⑧A. D. 1501 文龜元年、大宰府70次SD1805溝
 ⑨A. D. 1265 文永2年、博多62次713土壇

文献

- ①九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
 ②田辺昭三・吉川義章「平安京跡発掘調査報告(東京四条一坊)」1975 平安京調査会
 ③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
 ④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
 ⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
 ⑥長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
 ⑦福岡市教育委員会「井相田G遺跡Ⅰ」「福岡市埋蔵文化財調査報告書179」1988
 ⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
 ⑨福岡市教育委員会「博多48」「福岡市埋蔵文化財調査報告書397」1995

Fig.1 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器年



- | | | | |
|------------|-----------------|-----------|---------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡(報告地点) | 19. 原口遺跡 | 28. 剣塚遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 篠振遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 陣ノ尾遺跡 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 峯・峯煙遺跡 (●は軍火葬墓) |
| 4. 筑前国分寺跡 | 13. 遠賀団印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 太宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 5. 辻遺跡 | 14. 大宰府衆坊跡(破線内) | 23. 壺川遺跡 | 32. 浦城跡 |
| 6. 国分松本遺跡 | 15. 君煙遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 原遺跡 |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 京ノ尾遺跡 |
| 8. 国分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 脇道遺跡 | 35. カヤノ遺跡 |
| 9. 御笠団印出土地 | 18. 神ノ前窯跡 | 27. 殿城戸遺跡 | |

Fig.2 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30,000)

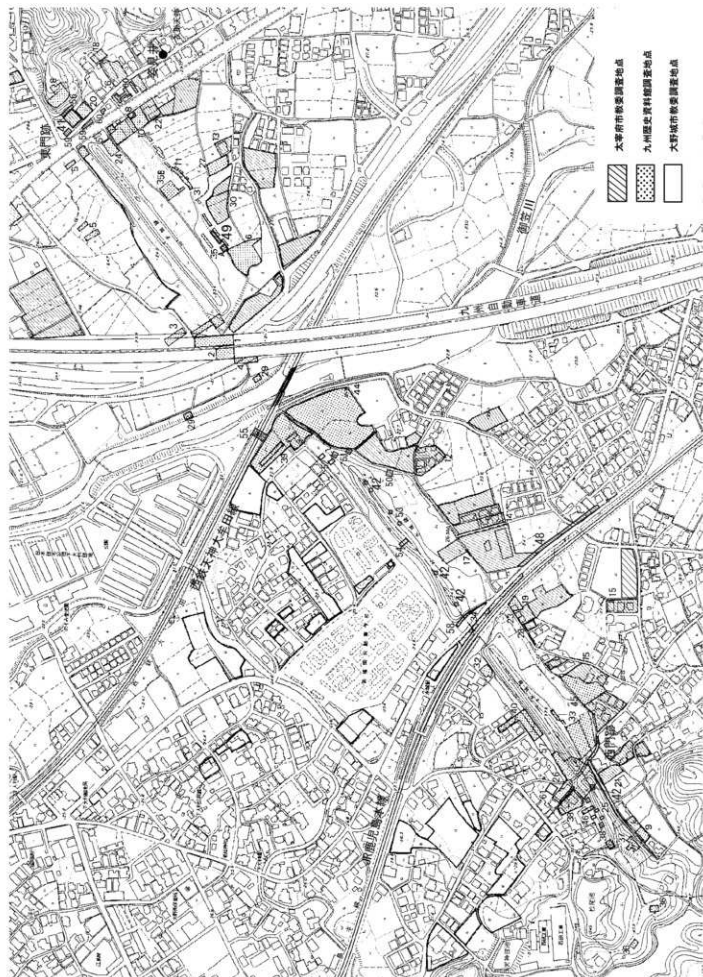


Fig.3 調査地と周辺調査地点 (1/5000) (『水城跡 上巻』九州歴史資料館 2009 に加筆)

I、遺跡の位置と歴史

661年、唐・新羅軍に滅ばされた百済の救済のため朝鮮半島に向かった朝廷が、663年白村江の戦いで敗北し、唐・新羅の脅威にさらされることとなった。その脅威に備えて、防人や烽を配備すると共に、664年から北部九州から瀬戸内沿岸にかけて防衛施設が造られていく。水城もその防衛施設のひとつで、『日本書紀』天智天皇三年是歳条に「築大堤、貯水。名曰水城」とあり、水城は664年に築造されたことがわかる。また、東門近くの8世紀後半の井戸からは「水城」と墨書された土師器も出土し、遺物からもこの土塁が水城であることが明らかである。

水城は、福岡平野と筑後平野が繋がる最も狭い箇所築造された土塁である。土塁は軟弱地盤補強のため積土の最下層に敷粗朶を敷いた上で、質が異なる土を層状に突き固めている。また、2000年、水城跡博多側テラス掘で行われた立会調査で、テラスからはみ出していた高まりが、人工の盛り土でなく地山であったことが判明し、以前は全て盛土と考えられていた水城が、いくつかの丘陵を取り込んで築造されたことが明らかとなった。

長年水城跡の周囲は田畑であったため、『日本書紀』に記載されている貯水については長年議論されてきた。1972年に大土居水城跡で実施した発掘調査によって、土塁の博多側で深い落ち込みが確認され、外濠の存在が注目されるようになった。1975年には水城跡の調査でも、博多側で外濠のものと推測される立ち上がりを確認され、幅60mの外濠が存在することが明らかとなり、日本書紀の記事を裏付けるものとし、貯水の問題について一応決着することとなった。また、太宰府側には10m前後の溝状の内濠の存在が確認されている。しかし、外濠・内濠とも後世の流路により、残存状況が良好ではなく、その構造は未解明な部分が多い。

1930年、東門横で木樋が確認され、後に導水施設であることがわかった。1990年に吉松で行われた第17次調査では、新たな木樋が確認され、東門の木樋とともに導水構造を知る重要な発見となった。現在発掘調査で4基の存在が確認されている。小水城でも、1997年から実施された大土居水城跡の調査で木樋が確認され、外濠への導水構造解明の資料が増加した。また、土塁が途切れている御笠川には、1974年の調査で石敷遺構が確認され、洗堰が想定されている。

1995年からは西門の発掘調査が行われ、3期にわたって築造された門構造が確認された。築造当初の掘立柱の城門柱材も検出され、築造当初は冠木門様な簡易的な構造であったが、奈良時代になると八脚門、樓門と変遷したことが推測されている。

東門近くの第31次調査では、8世紀中頃の平瀬が確認された。天平神護元(765)年、少武従五位下采女朝臣浄庭が修理水城専知官に任命されており、新羅との関係悪化に伴い、中央政権の指導の下、諸施設が再整備されたと考えられる。

その後、水城は太宰府の出入口として関門的な役割を担い続け、『平家物語』巻第8の記述から、寿永2(1183)年までは、戸と呼べるような建築物が東門に存在したことが窺い知ることができる。しかし、元寇のことを記した『八幡愚童訓』には、東門は礎石のみとなっており、13世紀後半には、水城はその役割を終えていたものと推測される。

II、調査体制

(平成 18 / 2006 年度)・・・第 41 次調査

総括	教育長	關 敏治		
庶務	教育部長	松永栄人		
	文化財課長	齋藤廣之		
	保護活用係長	久保山元信		
	調査係長	永尾彰朗		
調査	主任主査	齋藤実貴男	吉原慎一	
	主任主査	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎
	技術主査	井上信正		
	主任技師	高橋 学	宮崎亮一	
	技師 (嘱託)	柳 智子	下高大輔	

(平成 19 / 2007 年度)・・・第 42 次調査

総括	教育長	關 敏治		
庶務	教育部長	松永栄人 (～9月30日)		松田幸夫 (10月1日～)
	文化財課長	齋藤廣之		
	保護活用係長	久保山元信 (～9月30日)		菊武良一 (10月1日～)
	調査係長	永尾彰朗		
調査	主任主査	吉原慎一	齋藤実貴男	
	主任主査	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎
	技術主査	井上信正		
	主任技師	高橋 学	宮崎亮一	
	技師 (嘱託)	柳 智子	下高大輔	大塚正樹 端野晋平

(平成 21 / 2009 年度)・・・第 48・49 次調査

総括	教育長	關 敏治		
庶務	教育部長	山田純裕		
	文化財課長	齋藤廣之		
	保護活用係長	菊武良一		
	調査係長	永尾彰朗 (～6月30日)		井上 均 (7月1日～)
調査	主任主査	吉原慎一	齋藤実貴男	
	主任主査	山村信榮	中島恒次郎	井上信正
	技術主査	宮崎亮一		
	主任技師	高橋 学		
	技師	遠藤 茜		
	技師 (嘱託)	柳 智子		
	都市整備課 係長	景観・歴史のまち推進係 城戸康利 (文化財課併任)		

(平成 23 / 2011 年度)・・・姿見井調査

総括	教育長	關 敏治		
庶務	教育部長	齋藤廣之		
	文化財課長	井上 均		
	保護活用係長	菊武良一		
	調査係長	池本義彦		
	事務主査	橋川史典		
調査	主事	古川あや		
	主任主査	山村信榮	中島恒次郎	井上信正
	技術主査	高橋 学	宮崎亮一	
	主任技師	遠藤 茜		
	技師 (嘱託)	白石溪牙		
都市計画課	景観・歴史のまち推進係			
	係長	城戸康利 (文化財課併任)		

(平成 27 / 2015 年度)・・・報告書発行

総括	教育長	木村甚治		
庶務	教育部長	堀田徹		
	文化財課長	菊武良一		
	文化財副課長	城戸康利		
	保護活用係長	友添浩一		
	調査係長	山村信榮		
調査	事務主査	廣見京子		
	主事	有田ゆきな	久木原駿史	
	主任主査	井上信正	高橋 学	宮崎亮一
	主任技師	遠藤 茜		
	技師	沖田正大	中村茂央	
都市計画課	景観・歴史のまち推進係			
	係長	中島恒次郎 (文化財課事務取扱)		

Ⅲ、調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群Ⅰ』(太宰府市の文化財第14集 1989)、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』(太宰府市教育委員会 2001年9月改訂)に基づいている。

調査では、表土剥ぎをバックホーによって行った。遺構図や土層図は適時1/10、1/20等で記録し、遺構全体図は、第49次調査は1/100縮尺の平板測量を行い、その他は人力によって1/20の縮尺で実測を行った。

整理に際し、時期が特定できそうな遺物については、実測作業を行っている。一緒に出土している遺物については、出土遺物一覧表も同時に確認して頂きたい。

これらの調査で得られた出土遺物や実測図等は太宰府市文化ふれあい館に保管している。

IV、調査報告

1、水城跡第41次調査

(1) 調査に至る経緯

本調査地点は太宰府市国分二丁目195、195-1で、水城東門跡にあって、敷地の一面には東門礎石とされる石が置かれている。この土地が平成16年度に公有化されたことから、水城東門跡の宅地跡を史跡見学のための広場として仮整備することとなり、2005（平成17）年11月24日現状変更申請を行い、県文化財保護課と協議のもと、工事に先だって2006（平成18）年2月15日より同年3月17日の間でトレンチによる確認調査を実施した。調査面積は72.2㎡で、調査は山村信榮・柳智子が担当した。

(2) 基本層位

今回の調査は確認調査であるため、調査区にトレンチを設定した。調査区は水城東門礎石北東側に隣接しており、調査以前から東門に関わる遺構や水城土塁の積土の検出が想定されていた。そのため、東門礎石周辺は広めにトレンチを設定し、重点的に調査を行なった。調査区北から南にかけて、1～5トレンチを設定している。

調査区には近現代までの整地層が地山検出の最終面まで堆積していた。土層や検出時の状況から繰り返し整地を行なっていることから、近世～近現代までの絶え間ない生活活動の一旦を窺うことができた。遺構面は現況面から約10～20cm除去すると検出できた。遺構面については2トレンチ部分で近現代～近世の面で一旦検出し、近世の土間と思われる橙色土・黒橙色土の整地層上面で遺構を検出し、最終面である地山まで掘り下げ調査を行なった。整地層上面と最終面においては、基準とした整地層が途切れている部分もあり、取り上げた土層の整理を行なっておきたい。

まず、表土除去後、遺構検出時に上層からの混入を考え、茶灰色土の任意土層を設定した。その後、2トレンチにおいては近世の整地層（S-16～19）にS番号を付けて、掘り下げを行なった。近世の土間と思われる橙色土（S-5）・黒褐色土を検出し、検出時には茶色土の任意土層を設定した。整地層上面において、東門礎石に向かって掘り込む土坑（SK022）を検出した。黒褐色土下層にはさらに橙灰色土、黄色砂の整地層が確認でき、橙茶色土で取り上げを行なった。地山である黄色粗砂の花崗岩風化土の最終面には土坑（SK042）が検出でき、地山面は近世までの掘り込みにより、現況面から約30～125cmまで凹凸が激しい状況になっていることがわかった。他のトレンチは現況面から約30cmほどで地山が検出されている。

(3) 検出遺構

今回の調査で検出した遺構のほとんどは近世から近現代の時期に属する。全体として東門礎石北東で設定した2トレンチでは出土した遺物のほとんどが古代の瓦だが、地山直上の最終面にまで18世紀後半の陶磁器が出土している。水城に関わる遺構は東門礎石の移動時期が想定される土坑41SK022と水城土塁積み土の一部と考えられる整地層41SX001が検出されたのみである。

土坑

41SK022 (Fig. 6, Pla. 4・5)

東門礎石北東側、2トレンチで確認された土坑である。現在の礎石周辺にある石柱に沿うような形状をしているが、全様は不明である。深さは現況面から約1mを測る。埋土は上から石柱を設置した際の礫を多く含む茶色土、地山である花崗岩風化土を多く含む茶色土に分けられる。礎石との関係を知るために礎石周辺を一部掘り下げた。その結果、礎石自体は地山には接地しておらず、SK022と同様

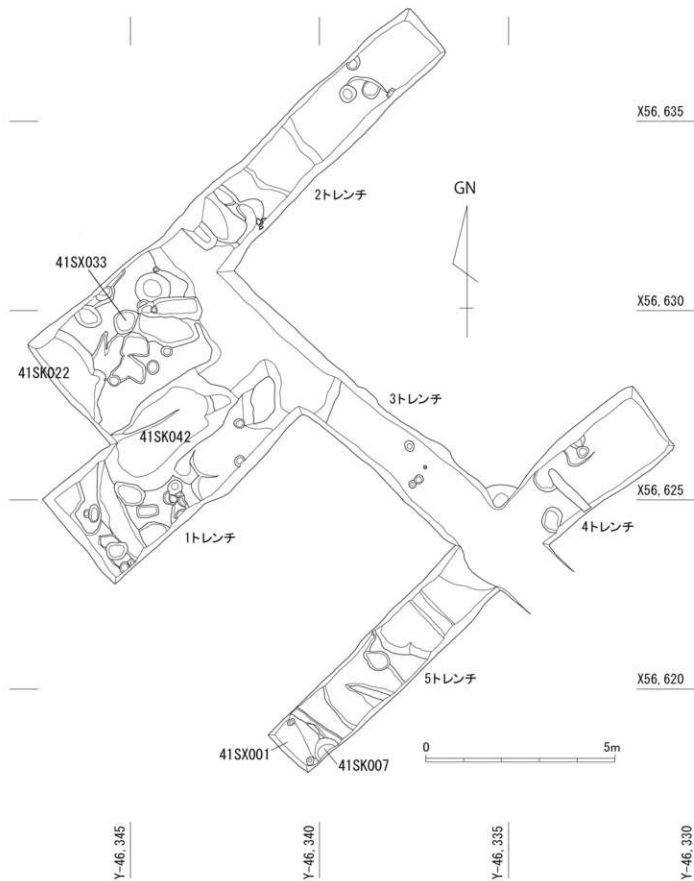
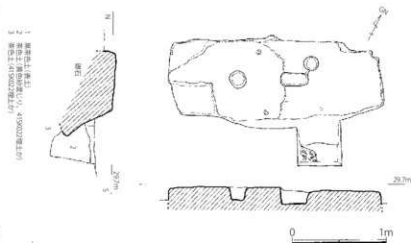


Fig. 4 水城跡第41次調査遺構全体図 (1/100)

水城東門礎石土層



41SK022 南壁土層

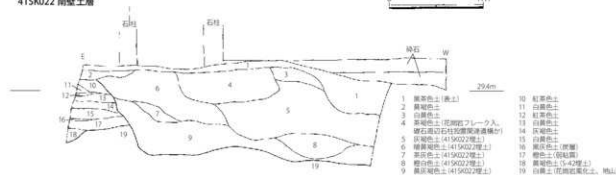


Fig.6 水城東門礎石・41SK022 遺構実測図 (1/40)

の埋土中に埋設していることが判明した。この土坑の時期は出土遺物から19世紀代と想定され、この頃に礎石も移動している可能性が高いと考えられる。

41SK042

2 トレンチ、地山(花崗岩風化土)で検出された長さ3.6×幅1.8m、深さ約0.6mを測る長方形の土坑である。出土遺物の多くが瓦で、少量ながら18世紀後半までの遺物を含む。

整地層

41SX001 (Fig.7)

5 トレンチ西端で検出された遺構である。溝状に検出され、上から黄色砂、茶色土、灰色砂の順に堆積している。非常に硬く締まった埋土である。調査区南側で、九州歴史資料館が調査を行なった水城跡第20次調査で検出した積土遺構に類似している。検出できた範囲が非常に狭いことから遺構の性格を言及することが難しいが、上記調査の成果と合わせて丘陵に取り付く水城土塁の積土の始まりがこの場所と想定される。

埋甕

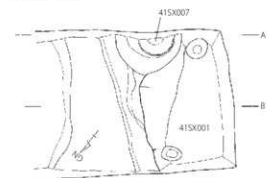
41SX007 (Fig.7)

5 トレンチで検出した埋め甕である。41SX001に切り込む遺構である。

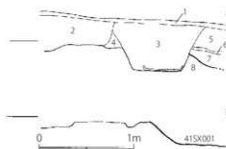
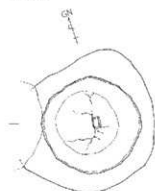
41SX033 (Fig.7, Pla.5)

2 トレンチの近世の整地層、橙茶色土上面で検出した埋め甕である。埋め甕を検出した位置には少なくとも2基の埋め甕(SX008・014)が、上層の整地層(SX017)で検出されている。遺構のすぐ北側には掘り下げた現代の下水槽があり、近世から現代に至るまで同じ場所がトイレとして使用されていることが分かった。

41SX001・SX007



41SX033



- 29.0m
- 1 灰青色(黄土、礫代)
 - 2 淡黄褐色土(礫代)
 - 3 灰青色土(礫代) 41SX007
 - 4 黄灰色土(礫代)
 - 5 黄褐色土(礫代)
 - 6 黄褐色土(SX001(礫土))
 - 7 灰青色土(礫代)
 - 8 黄白礫物土(河川礫物風化土、地山)
- B 29.0m



- 29.3m
- 1 橙褐色(遺構埋層土)
 - 2 黄褐色土(遺構埋層土)
 - 3 黄褐色土(遺構埋層土)
 - 4 黄灰色土(礫り方層土)

Fig.7 41SX001・033 遺構実測図 (1/40、1/20)

(4) 出土遺物

土坑

41SX022 出土遺物 (Fig.8、Pla.18)

須恵器

甕 (1) 厚さ1cmほどの硬質に焼成された甕の胴部片で、外面は平行刻み目のタタキ、内面に同心円状の当て具の痕跡が残される。

肥前系染付磁器

椀 (2) 口径5.9cm、器高4.9cm、底径3.9cmを測る。筒形を成し同中央に灰青色を呈す呉須で円窓門を描く。

香炉 (3) 内面に軸を施さないもので、緩くくびれる頸部を持つ。灰青色を呈する呉須でくびれ部に雷門のような連続した文様を描く。

国産陶器

椀 (4) 黄褐色の胎土に透明な釉を掛けるもので、削り込み高台を持つ。底径は4.1cmを測る。

皿 (5) 突形蛇目高台を有す。見込みに黒褐色の鉄釉で水草を描き、根元は呉須で水面を表現する。底径は6.0cmを測る。肥前系のもので19世紀前半以降の所産か。

土師質土器

鉢 (6) 外面は縦、内面に横方向のハケ目が残される。

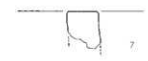
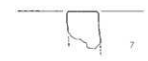
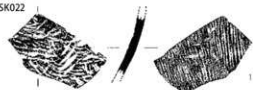
火ちりん (7) 厚さ2.6cmの口縁部片で、方形を呈す。

41SX041 出土遺物 (Fig.8、Pla.18)

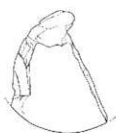
土師器

小皿 a (8～11) 3mm程度の薄い器壁で橙褐色を呈す。焼成は硬質で、8は口縁端部外面に黒い煤が

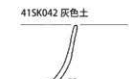
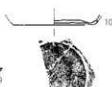
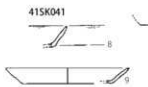
41SK022



41SK042 橙灰色土



41SK041



0 10cm

41SK042 灰色土

Fig. 8 41SK022・041・042 出土遺物実測図 (1/3, 瓦は1/4)

焼き付き灯火具であったことを示している。江戸期に属するものか。9は復元口径9.8cm、器高1.25cm、復元底径7.2cm、10は復元底径6.8cm。

肥前系染付磁器

碗 (11～13) ややくすんだ青色を呈す呉須で文様を描き、11は丸碗となり外面に山水文、12は内底部に草花文を施す。復元高台径4.8cm。

皿 (14、15) 14は底部と体部が鋭角に屈曲し短く先細になる高台を持つ。内底面にややくすんだ青色を呈す呉須で鳥を描く。口径13.4cm、器高2.3cm、底径9.0cmに復元される。19世紀前半以降の所産か。15は厚手の丸い形状を成す体部を持ち、薄い青色を呈す呉須で内面に絵付けする。内底面と外部下半は軸が施されない。いわゆるくらわんか手で18世紀後半以降の所産である。復元口径14.8cm。

徳利 (16) 厚さ0.5mm程度の頭部片で、ややくすんだ青色を呈す呉須で2条の圏線で絵付けする。
国産陶器

香炉 (17) 橙褐色の粗い胎土に乳白色の不透明な軸を施す。口径は11.0cmに復元される。

鉢 (18) 浅く屈曲して立ち上がる口縁を持ち、内底面には片彫り風のスタンプによる花文を施す。くすんだ暗緑色の光沢のある軸を施す。口縁端部には黒褐色の口紅を施す。口径20.0cm、器高4.6cm、底径9.0cmに復元される。

捕鉢 (19、20) 19は屈曲して立ち上がる口縁を持ち、褐色の鉄軸を施す。20は交差する捕り目を施し、軸は掛けない。

瓦類

丸瓦 (21) 内面に粗い布目の痕跡が残り、外面は光沢の無い黒色に燻される。江戸後期の所産か。

平瓦 (22) 内外面ともに平滑なナデを施し、内面に「□エ門」の人名と思われるスタンプを施す。江戸後期の所産か。

41SK042 橙灰色土出土遺物 (Fig. 8, Pla. 18)

国産磁器

碗 (23) 0.2mm程度の削り込みによる細身の高い高台が付く。19世紀前半以降の所産か。

赤絵磁器

徳利 (24) 厚さ0.3mmほどの白色の胎土に紅赤色の圏線と鳥の文様が施される。

国産陶器

鉢 (25) 橙褐色の粗い胎土に乳白色の不透明な軸を施す。平底を呈す。

土師質土器

焙烙 (26) 横方向の強いナデを施しラッパ状に開く口縁を持つ。器面はくすんだ灰色を帯びた褐色を呈す。

瓦類

丸瓦 (27) 中房が周縁より高い形状を呈す。中房の乳が1+4+8の配置に復元される鴻臚館式（九歴分類223系）の軒丸瓦である。大宰府では政庁地区を中心に分布している。摩耗が進行している。

41SK042 灰色土出土遺物 (Fig. 8, Pla. 18)

土師器

碗 c (28) 外に大きく開く貼り付け高台を持つ。胎土はくすんだ灰褐色を呈す。9世紀後半から10世紀の所産。

国産陶器

碗 (29) 体部が開かない深手になるもので、黄白色の混入物の少ない胎土に黄色味を帯びた透明軸

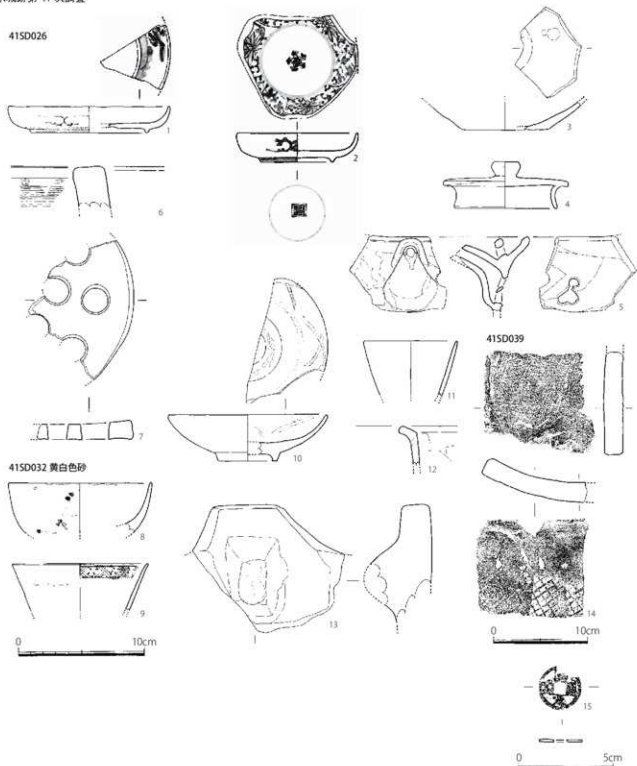


Fig. 9 41SD026・032・039 出土遺物実測図 (1/3, 15は1/2, 14は1/4)

を掛ける。

皿 (30) 緑色釉を掛け内底面を輪状に釉剥ぎを施す。高台は削り込みで直径4.6cmに復元される。

捕鉢 (31) 茶褐色の焼き締められた硬質の胎土に茶色の光沢のある釉を施す。底は平底を成す。

大皿 (32) 波状のハケ手に褐色の釉を掛ける。高台は削り込みにより成形される。内底面に連続した砂目の目跡が残る。高台径は13.5cmに復元される。

溝

41SD026 出土遺物 (Fig. 9, Pla. 18)

肥前系染付磁器

皿 (1～2) 1は突形蛇目高台を持ち、淡い青色の呉須で外面に唐草文、内面に山水に圏線、中央にコンニャク版の文を施す。口径12.8cm、器高2.1cm、高台径9.0cmに復元される。2は淡い青色の呉須で内外面に唐草文、内面にも唐草文に花文、圏線、中央にコンニャク版の文を施す。口径9.4cm、器高2.3cm、高台径5.2cmに復元される。

国産陶器

行平(3) 平底で横に開く胴部を持つ。茶褐色の胎土に灰白色の釉を施す。内底面に褐色釉が垂れる。底径が7.0cmに復元される。

土瓶蓋(4) 灰茶色の胎土に黒褐色の釉を施す。口径8.2cm、器高3.7cmに復元される。

土瓶(5) 橙色の精製された胎土に黄白色の釉に黒褐色の釉が流し掛けされる。急須ほどの小振りなものである。

土師質土器

火ちりん(6、7) 6は内面には横方向のハケ目を残し、厚さ2.5cmの口縁端部片で、方形を呈す。7は硬質の橙色を呈し2cmほどの穿孔を施す。直径が22cmほどの円盤状の棧の破片である。表面は被熱のため赤褐色を帯びる。

41SD032 黄白色砂出土遺物 (Fig. 9, Pla. 18)

肥前系染付磁器

碗(8～9) 8は丸碗で、くすんだ灰青色を呈す呉須で体部外面に草木類の文様を描く。いわゆるくらわんか手で、口径11.4cmに復元される。9はラッパ状に開く蓋茶碗で、青色の呉須で内側には四方禪文が描かれ、口径は10.8cmに復元される。19世紀前半以降の所産か。

皿(10) 高台を持つ浅い皿で、内面は輪状に釉剥ぎされる。薄くくすんだ灰青色を呈す呉須で内面に松葉文と圏線が施される。いわゆるくらわんか手で、口径12.6cm、器高3.7cm、高台径4.6cmに復元される。

国産磁器

猪口(11) 厚さが4mm程度の直線的に開く形状のもので、口径7.4cmに復元される。

土師質土器

涼炉(12) 橙褐色を呈す精製された胎土を持ち、口縁端部が内面に屈曲する。

火ちりん(13) 口縁が波状を呈す形状の端部片で掛け子の先端が欠けている。橙褐色を呈す精製された胎土を呈す。

41SD039 出土遺物 (Fig. 9, Pla. 18)

瓦類

平瓦(14) やや軟質の灰色を呈す胎土を持ち、厚さ2.1cmで内面に粗い布目、外面に目が長方形を呈す格子のタタキ目を残す。平安前期の所産と考えられる。

金属製品

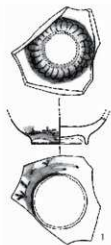
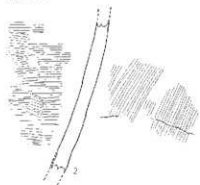
銅銭(15) 「寶」の文字の貝のつくりがスになるいわゆるス宝銭の古寛永通宝で、直径2.5cm、厚さ0.25cmを測る。

その他の遺構出土遺物

41SX008 出土遺物 (Fig. 10, Pla. 18)

色絵磁器

41SX008

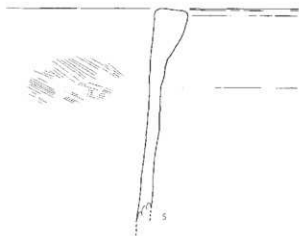
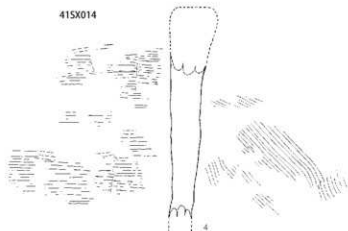


41SX011

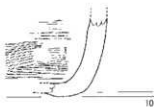
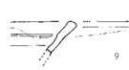


0 10cm

41SX014



41SX017



10

Fig. 10 41SX008・011・014・017 出土遺物実測図 (1/3)

碗 (1) 精製された乳白色の胎土に、細身の高台を持つ丸碗になるものと思われ、茶褐色と青色の呉須で外面は草花文、内面は花卉文を描き、内面はその上から緑色の透明な釉を施す。高台径は4.5cmに復元される。

土師質土器

大甕 (2) くすんだ橙褐色を呈すやや粗い胎土で、厚さ1cmを呈す。内面は横方向、外面は斜位のハケ目を施す。

41SX011 出土遺物 (Fig. 10, Pla. 18)

肥前系染付磁器

碗 (3) ごく薄い灰青色の呉須で外面に稲束文を描く丸碗で、口径8.3cm、器高5.8cm、高台径3.6cmに復元される。

41SX014 出土遺物 (Fig. 10, Pla. 18)

瓦質土器

大甕 (4) 端部に向かって厚みを増す口縁を持ち、内面は横方向、外面は斜位のハケ目を施す。

土師質土器

大甕 (5, 6) 5は4同様に端部に向かって厚みを増す口縁を持ち、内面は横方向、外面は斜位のハケ目を施す。6は体部の厚みが1cm程で内面に斜位のハケ目を施す。復元底径26.6cm。

41SX017 出土遺物 (Fig. 10, Pla. 18)

須恵器

高坏 b (7) 体部外面に段を持って外反する口縁を持つ。暗灰色を呈し焼成は硬質である。

国産陶器

碗 (8) 淡橙褐色の精製された胎土に光沢のある透明釉が掛けられる。施釉前に黒褐色の色材で施文する。高台は身幅が狭い角高台を削り出して成形する。高台径は5.6cmに復元される。

播鉢 (9) 直線的に大きく開く口縁の端部片で内側に若干の段を持つ。端部に茶褐色の鉄釉を施す。

瓦質土器

火消壺 (10) 砂粒が混じる粗い胎土で内面に横方向のハケ目を持つ。焼成は硬質で暗灰色を呈す。

41SX019 出土遺物 (Fig. 11, Pla. 18)

肥前系染付磁器

碗 (1) 濃青色の呉須で印版手の幾何学的な花文様を施す。復元口径10.6cm。

国産陶器

皿 (2) 浅い削り込み高台を持つ唐津系の稜皿と思われ、内面に光沢の無い茶色の釉が掛けられる。高台径は4.4cmを測る

鉢 (3) 口縁端部が短く屈曲するボウル形の鉢で、淡茶褐色の硬質の胎土に乳黄色の釉が施される。

仏飯具 (4) ワイングラス形の高坏形で硬質の橙白色の胎土に白色の釉が坏部に施される。口径7.4cm、器高7.0cm、底径5.2cmに復元される。

甕 (4) 口縁の断面形がT字を呈し、胴部より口縁部径が小さい形状を成す。胎土は茶灰色を呈す。

瓦類

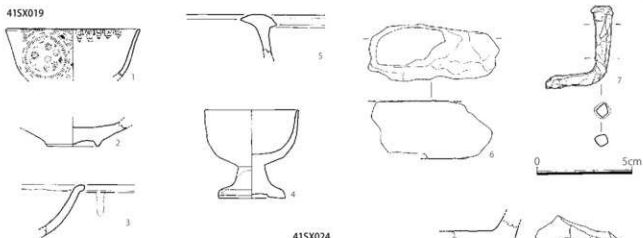
無文埴 (6) 厚さ6.2cmで、軟質の瓦質焼成のものである。奈良時代の所産と考えられる。

金属製品

鉄釘 (7) L字に屈曲した断面形が方形を呈すもので、頭の幅は1.2cm、曲がった状態での長さは4.4cmを測る。

1. 水城跡第41次調査

41SX019



41SX024



41SX031

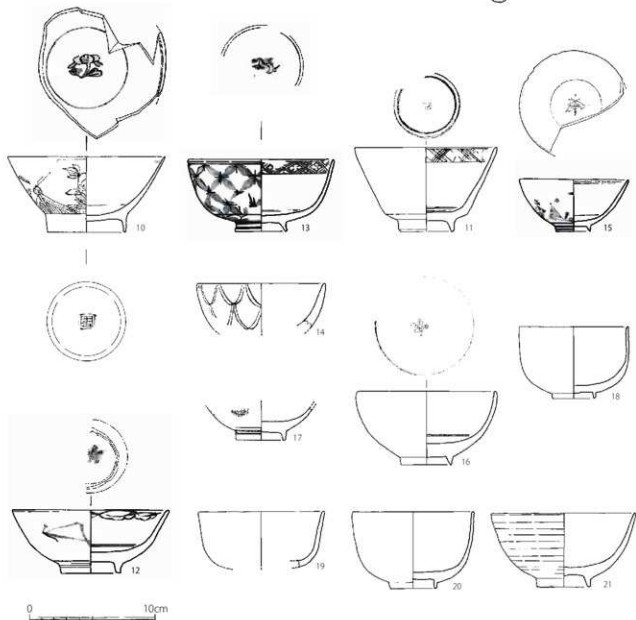


Fig. 11 41SX019・024・031 出土遺物実測図 (1/3、7は1/2)

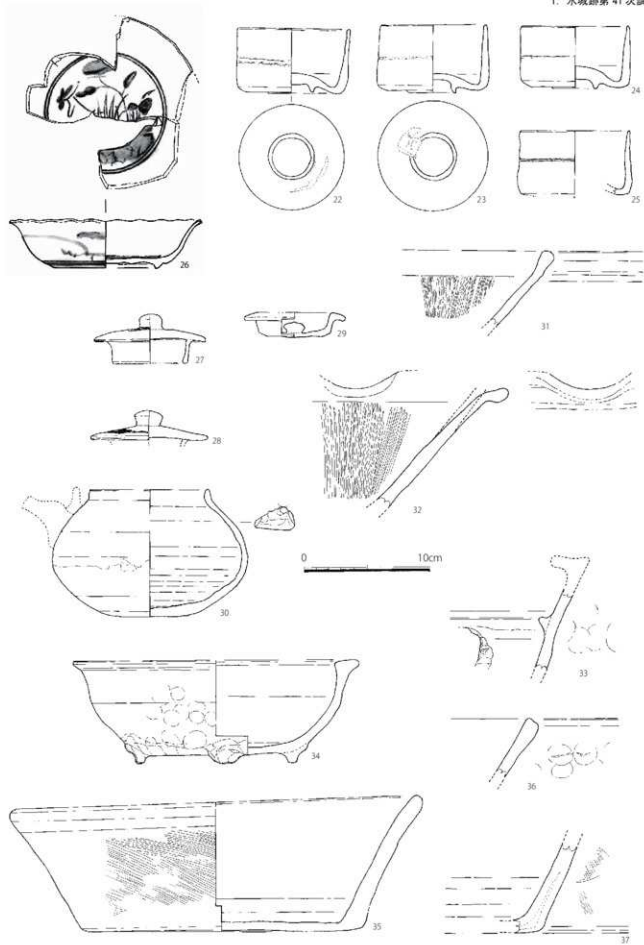


Fig. 12 41SX031 出土遺物実測図 (1/3)

41SX024 出土遺物 (Fig. 11, Pla. 18)

肥前系染付磁器

碗 (8) 丸碗の形態で、青色の呉須で花文と蝶文を施す。復元口径 8.3cm、

土師質土器

火ちりん (9) 橙色の粗い胎土で、柱状の貼り付けた脚部の破片である。

41SX031 出土遺物 (Fig. 11 ~ 13, Pla. 18・19)

肥前系染付磁器

碗 (10 ~ 17) 10は内底が丸く窪む広東碗、11は稜碗、他は丸碗になるものと思われる。11と13は青色の呉須で内側には四方禪文が描かれる蓋茶碗で、11は外面の軸が灰緑色を呈す。17には外面に12と16は内底面に花文のコンニャク版が押される。12は内底面が輪状に軸が拭き取られ重ね焼きされている。10は口径12.4cm、器高6.0cm、高台径6.2cm、11は口径11.2cm、器高6.7cm、高台径4.4cm、12は口径12.4cm、器高5.0cm、高台径4.8cm、13は口径11.6cm、器高5.7cm、高台径4.2cm、14は口径10.2cm、15は口径8.6cm、器高5.7cm、高台径2.8cm、17は高台径3.9cmに復元される。

国産磁器

碗 (18 ~ 25) 18 ~ 21は丸碗、22 ~ 25は背の低い筒碗で、18は口径8.7cm、器高5.7cm、高台径3.4cm、19は口径10.0cm、20は口径9.7cm、器高6.1cm、高台径3.7cm、21は口径11.5cm、器高5.9cm、高台径4.3cm、22は口径9.0cm、器高5.3cm、高台径3.4cm、23は口径9.0cm、器高5.2cm、高台径3.8cm、24は口径8.6cm、器高4.7cm、高台径3.4cm、25は口径8.7cmに復元される。

皿 (26) 外底面は突形蛇目高台で口縁は波状を呈す。内底面は二重の圏線の中に草花文を描く。口径15.2cm、器高3.7cm、高台径8.0cmに復元される。

国産陶器

土瓶蓋 (27 ~ 29) 焼きしまった茶褐色の胎土に乳灰色の斑のある釉を上面に施し、28・29はその上から茶黒色の釉を流し掛けする。27は口径5.6cm、器高3.9cm、28は口径9.2cmに復元される。29は楕円のある中央がへこむ平蓋式のもので、橙色の胎土に黄灰色の釉が掛けられる。口径8.0cm、器高1.9cmを測る。

土瓶 (30) 中央が膨らむ偏球形の胴部を呈し、赤茶褐色の胎土に灰茶色の釉が掛けられる。口径9.4cm、器高10.0cm、底径6.0cmに復元される。

播鉢 (31、32) ラッパ状に開く体部に、口縁が31は玉縁、32はL字状を呈す。赤茶色の粗い胎土に茶褐色の鉄釉が施される。内面の播り目は密に施される。

土師質土器

火ちりん (33) 上に傾斜して開く体部の破片で、円窓と内面に棧を置く返りがある。胎土は橙色を呈す。

鉢 (34 ~ 38) 橙色の粗い胎土を持ち、火桶と考えられるもので、斜位のハケ目が施され、平底にゆるく開く体部が続く。34は小型のもので3か所に短い脚が貼り付けられる。36と37は大型になる可能性がある。35は口径32.5cm、器高11.1cm、底径22.5cm、38は口径32.4cmに復元される。

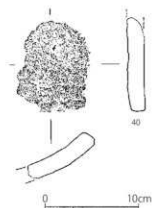
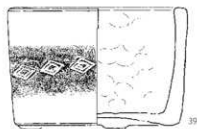
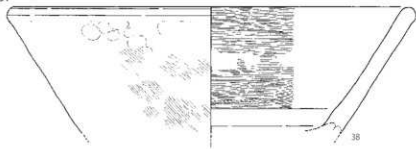
瓦質土器

火鉢 (39) 筒型の小型の火鉢で、体部外面は光沢を持ち黒く燻焼きされる。胴部中央に重菱形のスタンプが連続して押印される。口径14.2cm、器高9.7cm、底径13.0cmに復元される。

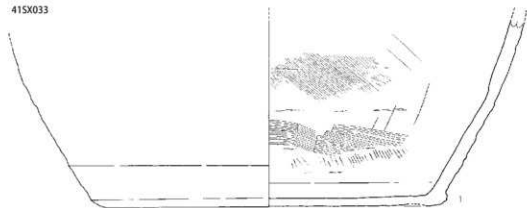
瓦類

平瓦 (40) 内面には目の細かい布の痕跡が残る、外面は無文、側面端部には分割のための切り込み

41SX031



41SX033



41SX035



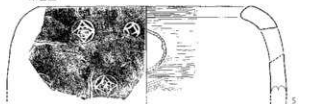
41SX036



茶灰色土



茶色土



橙茶色土

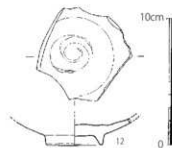
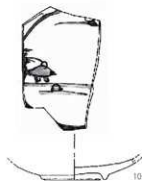
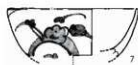


Fig. 13 41SX031・033・035、茶灰色土、茶色土、橙茶色土出土遺物実測図 (1/3、41・2・4は1/2、40は1/4)

と破面が残る。砂粒が混じる粗い胎土で、灰色で硬い須恵器質の焼成である。

金属製品

板状金属製品(41) 欠損した状態で剣先のような形状を呈し、長さ3.7cm、幅2.7cm、厚さ0.4cmを測る。

41SX033 出土遺物 (Fig. 13, Pla. 19)

瓦質土器

大甕(1) 外面の劣化が著しいが、内面は斜位のハケ目が施され、芯は白灰色、表面は灰黒色に焼成される。底径35.6cmを測る。便槽として埋設されたものか。江戸後期以降のものである。

41SX035 出土遺物 (Fig. 13, Pla. 19)

龍泉系青磁

水注×壺(2) 外反する頸部片で、内外面にやや灰色を帯びるくすんだ緑色の光沢のある釉を掛ける。軸調からIV系の製品か。

41SX036 出土遺物 (Fig. 13, Pla. 19)

金属製品

銅銭(3) 「寶」字の貝の下のつくりがスとなる古寛永通宝で、口径2.5cm、厚さ0.15cmを測る。

第41次調査 茶灰色土出土遺物 (Fig. 13, Pla. 19)

金属製品

鉄釘(4) コ字形に曲がる形状を成す。長さ6.0cm、幅2.9cmで釘の身幅は1.1cmを測る。

第41次調査 茶色土出土遺物 (Fig. 13, Pla. 19)

瓦質土器

風炉(5) 内湾する口縁端部に胴上部に円窓を空け、体部外面の上下2段に2種類の花菱文のスタンプを施す。内面にはハケ目が残る。内傾した口縁径は14.9cmに復元される。

第41次調査 橙茶色土出土遺物 (Fig. 13, 14, Pla. 19)

龍泉窯系青磁

椀(6) 淡灰色を帯びる胎土に、くすんだ緑色の光沢のない釉を掛ける。内底にスタンプの花文が施される。軸調からIV系の製品か。復元高台径5.0cm。

肥前系染付磁器

椀(7, 8) 体部の丸い丸椀で、ややくすんだ青色の呉須で外面に草花文を描く。7は口径10.4cm、8は口径10.0cm、器高5.0cm、高台径4.0cmに復元される。

蕎麦猪口(9) 直線的に広がる体部に沿って短く突出した高台を持つ。外面にはくすんだ青色の呉須で草花文を描く。口径6.8cm、器高5.6cm、底径4.8cmに復元される。

皿(10) 低い角高台を持ち、薄い青色で網浜文を描き、高台径が5.2cmに復元される。

国産陶器

椀(11) 黄褐色のきめの細かい胎土を持ち透明釉を施す。全面施釉して高台の先のみ釉を拭き取る。高台径は4.6cmに復元される。

皿(12) 黄褐色のきめの細かい胎土を持ち透明釉を施す。全施釉して高台の先と内底面は輪状に釉を拭き取る。高台径は4.6cmに復元される。

小壺(13) 短く外反する小ぶりの口縁を持つ。茶褐色の硬質の胎土に茶褐色の胎釉の上から白色の長石釉が施される。復元口径8.0cm。

大皿(14, 15) 斜位に開く体部で削り込みにより角高台を成形する。淡茶灰色の焼き締った胎土に内面に波状のハケ手の白土を施し、一部に褐色釉を流し掛ける。唐津系のもので15は高台径が

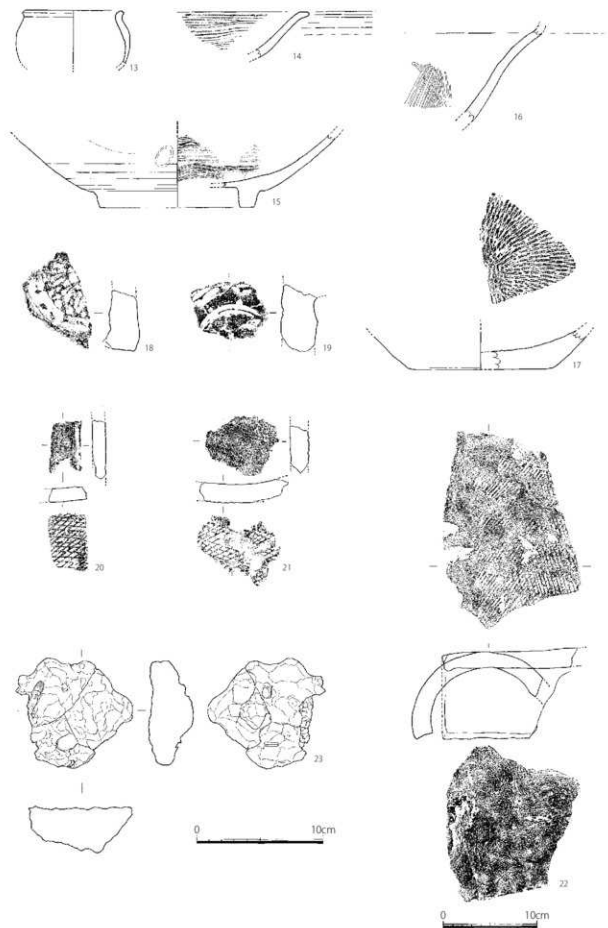


Fig. 14 第41次調査橙茶色土出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

12.2cmに復元される。

播鉢(16、17) 16はゆるく口縁端部が屈曲し、内面に交差する播り目を施す。くすんだ茶褐色の胎土で良く焼き締まっている。17は平底で密に播り目が施されている。胎土は赤褐色で硬質に焼かれている。底径は11.6cmに復元される。

瓦類

軒丸瓦(18、19) 18は乳白灰色の土師質を呈す焼成で、細身の花卉を線で表現するタイプ(九歴分類143系)のもので、大宰府政庁跡では第Ⅲ期成立時期に充てられ、10世紀中葉頃に位置づけられるものである。同系統のものが当該調査区南東での第18次調査区でも出土している。19は灰色を呈す硬質の焼成で、平板な長さが極端に短い単弁で間葉がない型式(九歴043系)の製品で、国分寺跡などで類似があるが大宰府では出土例が少ないものがある。

平瓦(20、21) 厚さが1.5cmを測り、灰色を呈す硬い須恵器質の焼成で、内面は目の細かい布目と外面に目の細かい斜格子のタタキ目が施される。平安前期頃の所産か。

丸瓦(23) 厚さが1.6cmほどのやや軟かい瓦質の焼成で、表面は黒灰色を呈す。内面は目の細かい布目と外面に目の細かい斜格子のタタキ目が施される。格子目は片側に密で、片側は対の刻みが施されず平行刻みになっている。平安前期頃の所産か。

金属製品

椀型滓(23) 赤茶色の鉄錆の塊状を呈し、長さ8.2cm、幅8.7cm、厚さ3.6cmを測る。

第41次調査 1 トレンチ表土出土遺物 (Fig. 15, Pla. 19)

土師器

小皿a(1) くすんだ茶褐色の胎土で底面は回転糸切りが残される。口径7.7cm、器高1.3cm、底径5.6cmを測る。13世紀代の所産か。

須恵器

甕(2) 厚さ1.2cmで灰色で硬質に焼き締った胎土を持つ。外面に目の細かな格子目のタタキと内面には同心円の当て具痕跡が見られる。

肥前系染付磁器

椀(3～5) ゆるく内湾する体部の丸椀で、外面にくすんで薄い青色の呉須で草花文を描く。3は口径10.6cm、器高5.1cm、底径4.2cm、4は口径10.0cm、器高5.2cm、底径4.4cmに復元される。

蕎麦猪口(6) 直線的に開く体部の外面に濃い青色の環珞文を描く。口径は6.8cmに復元される。

蓋皿(7) 端部が屈曲する体部を持ち、内面に竹林、外面に宝尺模様を描く。積み径は4.2cm、体部径は8.3cmに復元される。

皿(8) 不定形な変形皿で三角高台を持ち、内面に唐草文が描かれる。型による成形か。

大鉢(9) ゆるいS字に開く口縁を持ち、内面に濃い青色の呉須で芙蓉手の松竹梅を描くものと思われる。

国産陶器

播鉢(10) 口縁端部を上方につまみあげたような形状を持ち、茶褐色の焼き締った胎土に茶褐色の鉄釉を施す。

土師質土器

火鉢(11) 淡橙色のやや硬い胎土を持ち、断面形が台形を呈す脚を張り付ける。

金属製品

坏状金属製品(12) 貝杓子のおたまの坏部のような形状を呈すもので、長さ8.6cm、高さ1.7cmを測る。

1トレンチ表土



2トレンチ表土

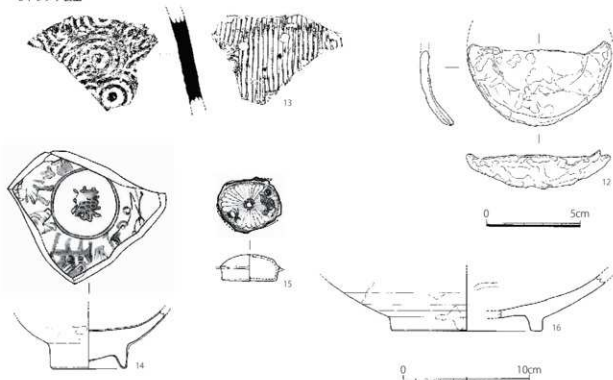


Fig. 15 第41次調査トレンチ出土遺物実測図 (1/3、12は1/2)

第41次調査 2トレンチ表土出土遺物 (Fig. 15, Pla. 19)

須恵器

甕 (13) 厚さ1.2cmで灰色で硬質に焼き締った胎土を持つ。外面に目の細かな格子目のタタキと内

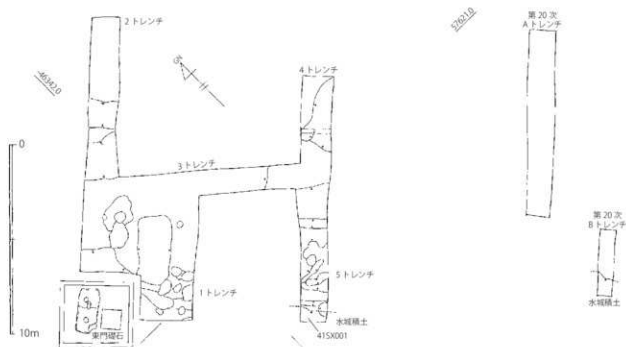


Fig. 16 第20次・第41次調査位置関係図 (1/400)

面には同心円の当て具痕跡が見られる。

龍泉窯系青磁

碗 (14) 底部中心の厚みが2.5cmもある厚く重い製品で、くすんだ緑色のやや厚みのある釉を施し、内面は圏線内にさんずいと草冠に「廉」を組み合わせた文字と圏線外には放射状に人と馬のような文様をあしらったスタンプによる施文が見られ、外面には片彫りによる草花文らしい文様を施す。IV類以降の製品と思われ大宰府では未分類の製品である。高台径6.2cm。

肥前系染付磁器

水差し (15) 平面が小判形で断面形はドーム型を呈し、天井中央部に径が5mmほどの穿孔を施す。型による成形の作で天井部に蜘蛛と葵の葉をあしらい、葉の部分に濃い青色の呉須で彩色する。

国産陶器

大皿 (16) 淡灰色の焼き締った胎土を持ち、内底面は白土をハケ塗りし一部に茶黒色の鉄絵を描く。高台は削り出しによるもので径は12.0cmに復元される。

(5) 小結

本調査で水城東門の構造に直接かかわる遺構の検出が期待されたが、古代の遺構は調査区南西の5トレンチ西側で水城の積み土に関わる可能性がある41SK001を検出したに止まった。東門礎石といわれている削り込みのある大石の下部には江戸後期の土坑(41SK022)があり、原位置にあるものでないことがわかった。水城の積み土に関わる可能性がある41SX001は第20次調査Bトレンチでも確認されており、様相としては連続している。近世以降の土地利用による遺構の形成が活発で古代についてはノイズが多い状況であるが、門に至る官道の存在も想定される個所に近く、無文埴や奈良・平安期の軒瓦類が散見される状況から瓦を所要した施設が至近にあった可能性は高いと言える。また、一方で当該調査区の南東側で行った第16・18次調査区でもまとまって無文埴や軒瓦が出土しており、門内側での官衙的な施設の存在も想定され、そちらとの関係も考慮しておく必要があろう。

近世の出土遺物についても第16・18次調査区での出土傾向に類似しており、くらわんか手の段階の遺物から多量の陶磁器が消費されるようになり、明治期まで継続している。同じ意匠の茶碗が複数出る

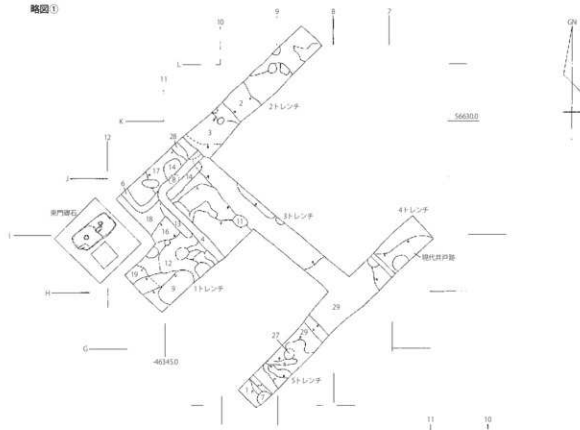
など店舗的な様相もあるが、仏飯具などの日用品もある。同時期の太宰府天満宮周辺の連歌屋遺跡や馬場遺跡と比較した場合、関西系の陶器など他国産のものや、須恵焼など奢侈品の出土が少ない傾向があり、本遺跡の置かれた背景を知る手掛かりになりそうである。

表.1 第41次調査遺構一覧表

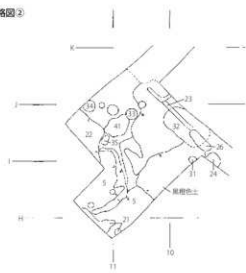
S-番号	遺構番号	種別	堆積土	遺構先後関係	時期	地区番号
1	41SX001	整地層	灰色土→茶色土→黄色土	1→7	古代か	F9
2		覆土			現代	K9
3		覆土			現代	J10
4		コンクリート基礎		6→4	現代	H~J10
5		整地(土間)	橙色土		近世~	H11
6		コンクリート基礎		6→4	現代	I11
7	41SX007	埋め残	茶色土	1→7	近世~	F9
8	41SX008	埋め残			近世~	I10
9		整地層	暗黄茶色砂		近世~	H10
11		覆土			現代	I9
12		整地層	橙黄砂土		近世~	H10
13		整地層	橙灰色土		近世~	I10
14	41SX014	埋め残	橙色土		近世~	J10
16		整地層	黄色砂		近世~	I11
17	41SX017	整地層	橙灰色土		近世~	J11
18		整地層	暗灰色土		近世~	I11
19	41SX019	整地層	茶色土		近世~	H11
21		Pit	黄茶灰色土		近世~	G11
22		土坑	黄茶色土		近世~	I11
23		溝	灰色土		近世~	I9
24		Pit群	橙灰色土		近世~	I9
26	41SD026	溝	茶色土	32→26	近世~	I9
27		Pit	灰色土		近世~	F8
28		Pit	茶色土		近世~	J10
29		整地層	橙灰色土→灰白色砂		近世~	G8
31	41SX031	Pit	茶色土		近世~	I9
32	41SD032	溝	黄白色砂	32→26	近世~	I9
33	41SX033	埋め残	茶色土		近世~	I10
34	41SX034	Pit	茶色土		近世~	J11
35		Pit	茶色土		近世~	I11
36		Pit	茶色土		近世~	H11
37		Pit	茶色土		近世~	H11
38		Pit	茶色土		近世~	H10
39	41SD039	溝	黄茶色土		近世~	H11
41	41SK041	土坑	黒黄色土		近世~	I11
42	41SK042	土坑	橙色土→灰色土		近世~	I10, I11
43		Pit	黄茶色土		近世~	I10
44		土坑	黄色土		近世~	I10
46		Pit	茶色土		近世~	I10

1. 水城跡第41次調査

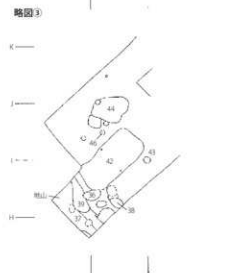
略図①



略図②



略図③



1トレンチ土層模式図

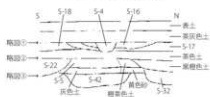


Fig.17 第41次調査遺構略測図 (1/200)

2、水城跡第42次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は御笠川より西側で、調査地点は全て上成土塁上で、太宰府市大字吉松字土居 133-1、133-3、133-4、134-1、139-2、139-1、145、146-1、146-2、148、149-1、155-1、大字吉松字星ヶ浦 472 である。

2006（平成18）年9月17日に九州を縦断した台風13号の影響で、上成土塁上の樹木が根こそぎ転倒し土塁を破損した。その復旧工事のため、倒壊した樹根部分の清掃および土塁の状況確認調査を実施することとなった。主な被害箇所5地点を西からA～E区とした。被害地は安全のため仮埋めされていたため、人力でその埋土を除去し、比較的深く版築状況が確認できたA区とC区について、土層観察および記録を行った。調査は2007（平成19）年8月23日～8月27日に実施した。調査・実測は宮崎亮一が行った。調査地点は5地点で、調査面積は合計25㎡である。

(2) 調査成果

・A区 (Fig. 19, Pla. 6)

西門跡の西側土塁頂上で、大きさ2.8×3m、深さ0.9mほどの倒木痕で、危険防止で仮に埋められていた埋土を半分ほど除去し、調査を行った。版築は、大きく分けると0.1m間隔で赤色土と黄灰色土の交互に積み、土塁頂部から太宰府側に向かって傾斜する状況が確認できた。調査範囲では、土質に目立った締り具合は確認できなかった。

・B区 (Pla. 7)

JR鹿児島本線の東側すぐの土塁上で、最大幅2.5m、深さは最深で0.5mあったが、全体として0.2～0.3m

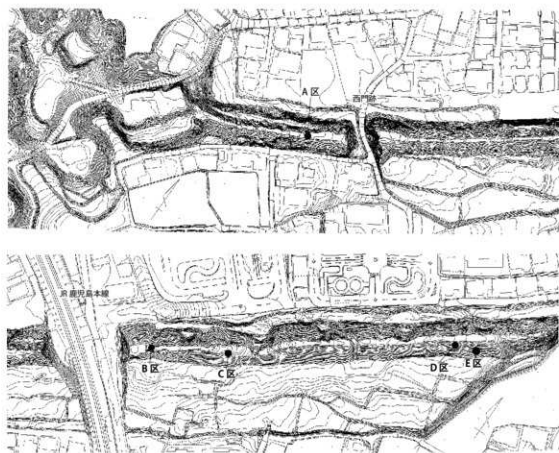


Fig. 18 第42次調査位置図 (1/2400)

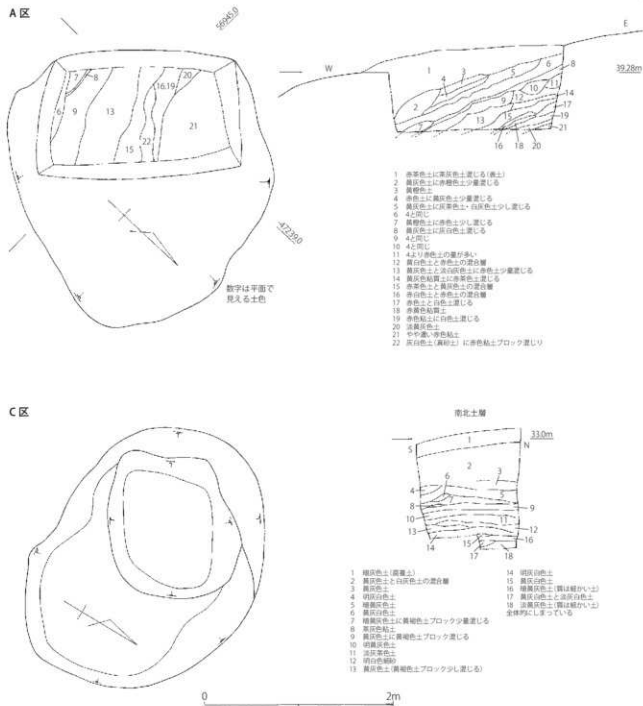


Fig. 19 第42次調査A・C区遺構・土層実測図 (1/40)

程の浅い不定形な倒木痕で、土層そのものへの被害は少なかった。付近一帯は表土に腐葉土がほとんどない状態であった。深さ0.2m程で黄色土と淡黄灰色土の互層(版築)が見え始めていた。

・C区 (Fig. 19, Pla.8)

大きき2.8×2.2m、深さ1.3mほどの倒木痕である。土層の版築は黄灰色土とそれに似た土質であるが、明暗のある黄灰色土を交互に突き固めていて、全体的に締まっている。

・D区 (Pla.7)

欠堤部近くの太宰府側で、大きき1.6×1.0m、深さ0.7mほどの倒木痕である。上面は灰茶色の腐葉土で、その下は黄灰色土と淡灰茶色土の互層で、太宰府側に傾斜している。土質が粗いためか締まりが悪い。

・E区 (Pl a. 7)

D区近くの、径2.2m、深さ0.8mほどの倒木痕である。樹木の根張りなどで深さ0.8mまでの黄灰色土（真砂土）は締まっていない。その下はやや締まった土質である。版築は明瞭でない。

(3) 出土遺物

危険防止のために埋められた土から、土師器の破片と近世の瓦が出土したが、土塁に伴う遺物は出土しなかった。

(4) 小結

土塁は主にA区が赤色土、B～E区が黄灰色土（花崗岩風化土）で版築が行われていた。西門跡西側のA区では、版築が土塁頂部から太宰府側に向かって傾斜する状況が確認できた。この積土が太宰府側に傾斜する状況は、過去の調査（第26・33次など）でも確認されている。これは盛土に浸透し飽和した水を太宰府側に排水させ、土塁の安定を図る構造と推測されている。

水城跡の上成土塁上にはクスやアラカシなどの大木が繁茂しているが、D区で確認されたように、見た目には版築状の土層が確認できるが、樹木の根が成長したことによって細かい裂け目が生じ、本来固いはずの版築が柔らかい土壌に変化している状況が観察できた。倒木による土塁の破壊はもちろんだが、土塁上の樹木が成長することによる土塁破壊も深刻な状況であり、適切な樹木管理が必要である。

参考文献

林重徳「現代の土木技術者から見た水城の構造と築堤技術」『水城跡 下巻』九州歴史資料館 2009

表 3 水城跡第42次調査 出土遺物一覧表

A区 表土	
土	師 破片

B区 表土	
土	師 破片

E区 表土	
土	師 破片
瓦	近世し瓦

3、水城跡第 48 次調査

(1) 調査に至る経緯と成果 (Pla. 9)

調査地は太宰府市吉松 1 丁目 196-1、198-8 他で、JR 鹿兒島本線沿いである。

調査は、市道水城駅・口無線の拡幅工事に伴うもので、調査は工事の進行を見ながら、2009(平成 21)年 6 月 11 日～2010(平成 22)年 3 月 12 日で行った。対象面積は 185 ㎡、調査面積 37,306 ㎡である。調査は中島恒次郎が担当した。

2009(平成 21)年 1 月 29 日、確認調査を行い、一部で遺構と包含層が僅かに確認されたため、道路計画線に沿って、確認トレンチを設定し調査を実施した。調査地は現市道から約 1.5m 程低い土地で、その現況地表面から 0.6～0.8m ほどは盛土で、その下に旧耕作土がある。その下には暗灰色の中粒～粗粒砂が堆積し、深さ約 1.2m～1.9m で黄白色粘土層が確認できた。いずれのトレンチでも遺物ならびに遺構と考えられるものは確認できておらず、基盤層(黄白色粘土)上面の砂層の堆積状況を考慮すると、河川などによる流出の可能性が考えられる。

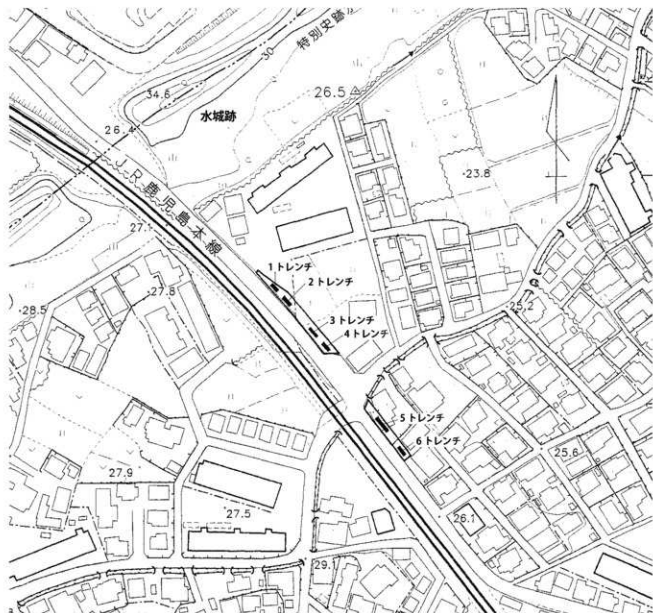


Fig. 20 第 48 次調査位置図 (1/2000)

4. 水城跡第49次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市国分1丁目247-2で、下成土塁の太宰府側に位置する。

調査地は2地点で、ひとつは平成13年度の水城跡環境整備で、法面保護のための植生土壌を積んだ箇所である。しかし、その後再び崩落を起こしたため、復旧工事を実施することとなった。もう1ヶ所は崩落地点の西側で、田圃の畦道の延長上にあり、近所の人や見学者が土塁に上り下りするためにできた通路で、これ以上の損傷を防ぐため階段を設置することとなり、その事前調査を行った。

発掘調査は2009(平成21)年9月7日～2010(平成22)年3月13日の期間で断続的に実施した。調査・実測は宮崎亮一が行った。調査面積は合計62㎡である。

(2) 調査成果

階段設置箇所をA地区、土塁崩落箇所をB地区とした。崩落土や表土はバックホーで除去し、細部を人力で除去した。全体図を1/100で平板測量し、土層図は1/20で作成した。

A地区 (Fig. 23, Pla. 13)

田圃の畦道の延長上にあたるため、土塁に上り下りする人たちによって、土塁に対し若干斜め方向に幅0.5m程の窪んだ通路ができていた。調査範囲は通路とその周囲1mほどで、幅3.3mで設定した。

現状の地形がやや窪んでおり、かつて崩落があったものと推測される。積土の検出面も同じように窪んだ状態になっていて、西側の上半部は一部層状盛土が未検出であったため、さらに抉れるものとみられるが、階段設置のための情報は十分得られていたため、それ以上の追及は行っていない。表土除去後に観察できた下成土塁の積土や層状盛土については、ほぼB区と同じ状況であったため、B区の方で詳述する。

B地区 (Fig. 23・24, Pla. 10～12)

土砂崩落が起きている長さ11.5mの範囲で表土を除去した。崩落を免れた下成土塁には細かい層が確認でき、その層位は大きく分けると10層に分けられる。最上部から整理すると、最上部の第1層は整備の盛土や腐食土などの表土。第2層が旧耕作土と考えられる暗灰色土系の土層。第3層は黄色土層。第4層は暗灰色土層(図の12層)。第5層は真砂土に似た白色土層。第6層は暗灰色土層。第7層は黒灰色や黄色の粘土層。第8層は橙黄色土と白灰色土の互層。第9層は白灰色土層。第10層は黒色土層で水城築造前の表土の可能性が考えられる。第6層と第7層の間で明瞭な土質の違いがあり、それを境に上層(第3～6層)は各層が厚く広範囲に広がっているのに対し、下層(第7～9層)は各層の厚みが薄く細かい。また、上層に比べると下層の方が締まっている。これらの状況から上層を層状盛土、

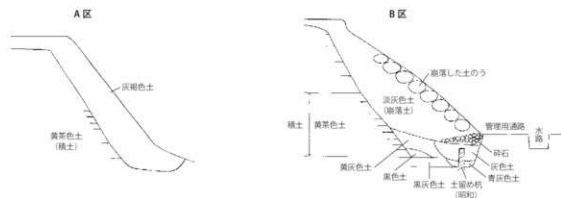


Fig. 21 第49次調査土層模式図

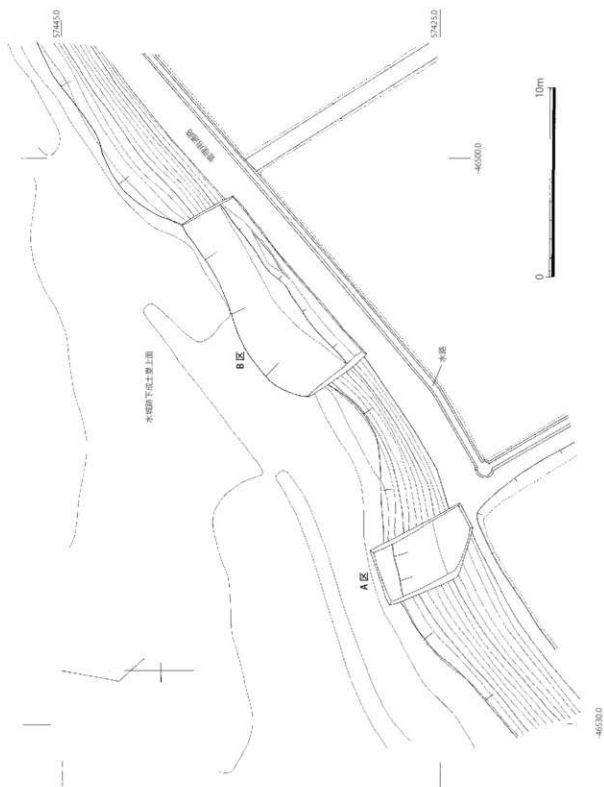


Fig. 22 第49次調査全体図 (1/200)

4. 水城跡第49次調査

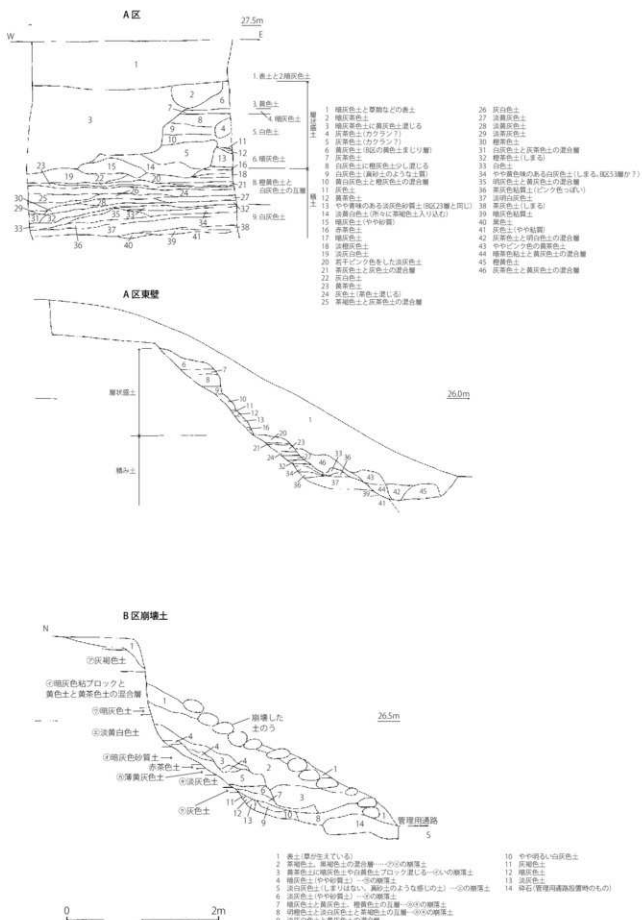


Fig. 23 第49次調査A・B土層実測図 (1/50)

下層を積土と区別できる。なお、遺物は崩落土から出土したものの、土塁自体の掘削をほとんど行っていないため、積土や層状盛土からの遺物はほとんどない。

今回の調査目的である崩落の原因である浸透水の状況であるが、10月2日の降雨時に観察を行った所、B区の中心付近で第7・8層から明確な湧水が確認された。第1～6層に関しては湧水が確認できず乾いた土質を保っていた。また、最下部の黒色土層には常時水が溜まっている状況であり湧水があるものと考えられる。周辺の土塁法面を観察すると管理用通路から高さ約0.5mの位置で、若干土砂がズレている箇所が多い。B区で確認した浸透水の湧水点が通路から高さ0.4～0.8m付近であることから考え合わせると、崩落の原因はこの湧水であり、この水分を多く含んだ土塁下部の表土が耐えきれなくなり、崩落につながっているのではないかと推測される。よって、土塁表面を流れる雨水は直接影響を与えていなかったと考えられる。

なお、管理用通路際では杭列や板柵が検出された。これは管理用通路設置直前まで土塁下端の各所に存在した土留めであり、土塁の崩落と農地確保の攻防を物語るもので、水城築造に関係のあるものではない。

(3) 出土遺物

上述したとおり、今回は復旧工事が目的の調査であり、土塁自体の掘削をほとんど行っていないため、土塁からの遺物はほとんど出土しておらず、築造年代に直接関係のある遺物は出土していない。よって、掲載した遺物は、主に遺跡としての水城跡の頃のものである。

A区

黄茶色土出土遺物 (Fig. 25)

弥生土器

壺 (1、2) 1は肩から頸部にかけての破片で、その境には突帯を巡らす。外面一部に丹塗りが残る。内面は磨滅するがナデ調整。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は橙褐色を呈する。2は甕の体部下半部分とみられる。M字形の突帯を貼付し、突帯とその下には丹塗りが残る。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を多く含み、淡黄白色を呈する。内面ナデ、外面ヨコナデ。

灰褐色土出土遺物 (Fig. 25)

須恵器

蓋3 (3) 口縁端部は若干つまみ出している。調整は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

杯c (4) 小さく低い高台を貼付する。色調は淡灰色を呈する。

土師器

杯 (5) 破片のため明確ではない。胎土は淡橙色で、薄い器壁である。内外面回転ナデ、外面下半はナデか。

土師質土器

鍋 (6) 内面は中位で若干屈曲し外反する。体部下半は細かいヨコハケ、外面は煤が付着する。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は暗黄茶色を呈する。

白磁

皿 (7) IX類。口縁端部内面は軸を掻き取っている。復元口径10.1cm。

肥前系磁器

皿 (8) 復元口径9.6cm、器高2.6cm、復元高台径4.3cm。全面施軸し、内面底部は軸を拭き取る。また、内面には呉須で圏線と草花文を描く。

瓶 (9) 復元高台径5.8cm。内面は強い回転ナデで露胎。外面は呉須で圏線を描く。外面底部や壘付

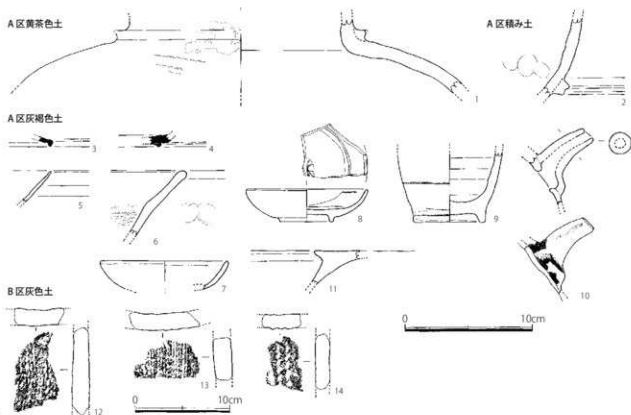


Fig. 25 第49次調査出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

は露胎。

国産陶器

土瓶 (10) 注口部分で、胎土は茶褐色で、外面は黄灰色に施釉し、部分的に淡灰緑色釉や暗茶褐色釉を施す。内面は露胎である。

弥生土器

高環 (11) 胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡橙褐色を呈する。内外面とも磨滅し調整不明。

B区

灰色土出土遺物 (Fig. 25)

瓦類

平瓦 (12~14) 外面は縄目叩き。14はやや粗い縄目である。内面は磨滅するが、12はナデ、14は布目痕がみられる。

(4) 小結

今回の調査で浸透水と法面前落のプロセスが明確になった。これは水城の構造を知る手がかりにもなる。水城は版築や積土が博多側から太宰府側に向かって傾斜して築造されており、博多側の土塁法面前落の回避と太宰府側への排水を計算した構造であるといわれている。水城跡の現状を見てもわかるように、土塁の博多側は崩落や欠損が少ないのに対し、太宰府側は土塁裾が蛇行しており、築造当時の法面を保っていないのは明確である。これは現在でも目の当たりにする豪雨後の法面前落が長年繰り返された結果であり、その要因が土塁からの浸透水であった。

4. 水城跡第49次調査

表.4 水城跡第49次調査 出土遺物一覧表

黄褐色土 (AIC)

弥生土 器 数

雑土 (AIC)

弥生土 器 壺×壺

灰褐色土 (AIC)

須恵 器 蓋?、杯a?、杯c、壺、甕?

土 師 器 杯、壺、破片

土師質土 器 鉢

肥前系陶磁 器 瓶、皿、破片

国産陶 器 壺?、樽鉢、土瓶、破片

国産磁 器 鉢、破片

白 磁 皿: 区 (1)

弥生土 器 高坪

瓦 類 平瓦 (横目、無文)、横し瓦

その他 ガラス

淡灰色土 (BIC)

須恵 器 壺

土 師 器 壺、鉢?、破片

肥前系陶磁 器 破片

国産陶 器 破片

国産磁 器 鉢

瓦 類 平瓦

灰色土 (BIC)

須恵 器 破片

土 師 器 杯

国産陶 器 破片

国産磁 器 破片

瓦 類 平瓦 (横目)

黄灰色土 (BIC)

土 師 器 破片

肥前系陶磁 器 染付 (破片)

5、姿見井の調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市国分2丁目182で、水城東門跡から南東140mの旧日田街道沿いに位置する。呼称は姿見井のほか姿見池、鏡ヶ池がある。

姿見井は、昭和後半にもなると池が汚れて荒地になっていたことから、水城東門跡付近に設置が検討されていた万葉歌碑がこの地に設置されることとなった。その後菅原道真ゆかりの伝説地でありながら、歌碑が水城東門に関係のある内容であること、姿見井の表示が全くなく、このままでは姿見井であることすら忘れ去られそうな状況などが問題視されていた。

平成23年度歴史的風致維持向上計画に基づき、これらの問題を解決するため、姿見井の伝説地に相応しい景観に復元する計画が、都市整備課によってなされ、文化財課でその内容について検討がなされた。検討内容は後述のとおりである。

そして、万葉歌碑は今後行われる予定となっていた水城東門跡整備に利用するため、撤去・移設し、対象地では、万葉歌碑設置時の整地土やそれ以前の堆積土の除去を行った。作業は2011(平成23)年11月25・28日に行い、その後記録作業を行った。遺存状況が極めて良好であったことと遺構を見られるのは今回限りということから、12月2日にマスコミに情報提供を行い、翌朝の新聞に掲載された。調査面積は10.4㎡を測る。調査は宮崎亮一が行った。整備工事は調査直後から開始し、2012(平成24)年2月10日に終了した。

(2) 伝承

① 記載文献

姿見井について掲載されている主な文献と記載内容は、以下の通りである。

『筑前国統風土記拾遺』 文政年間(1818～1830年)

「衣掛天神社 … 町内に姿見井また鏡井といふあり。五尺四方民家の軒にあり。」

『福岡縣地理全誌』 明治前期(19世紀後半)

「姿見井 國分町。民家ノ側ニアリ。徑五尺。里傳ニ、菅公宰府へ赴キ玉フ時、衣掛石ニ御衣ヲ掛玉ヒテ、衣服ヲ改メ、此水ニ御姿ヲ寫シ見玉ヒシト云リ。今ハ瀾水トナレリ。」

『筑前の傳説』 昭和11(1936)年 佐々木滋寛

「衣掛天満宮 … 衣掛の松と云ふ。その横の池に面して鉢を浄められたので之を鏡池といひ、疊一枚敷位の池が残ってゐる。」

『郷土読本 中巻』 昭和13(1938)年 水城尋常高等小学校

「衣掛天神 … 小さい池に水かがみをなさって、おつかれのすがたをよくよくごらんになったといふことです。お宮の前にある堀がそれだといひます。」

『太宰府の伝説』 昭和53(1978)年 藤田敏彦編

「鏡ヶ池跡 衣掛天神の社の鳥居が道に面して立っています。その鳥居より博多の方へ(西へ)一軒おいて道沿いに一坪ばかりの草地があります。ここが鏡ヶ池の跡です。」

『太宰府伝説の旅』 平成元(1989)年 大隈和子編

「衣掛天神 … また衣掛天神のそばに、現在、万葉歌碑が建っているところがあります。そこは以前鏡ヶ池あるいは姿見井と呼ばれる小さな池がありました。その池は道真公が衣服を改めたとき、この水に姿を写されたと伝える池です。しかし近年、汚れてしまったので埋めて現在に至っています。」

『太宰府市史 民俗資料編』 平成5(1993)年 太宰府市

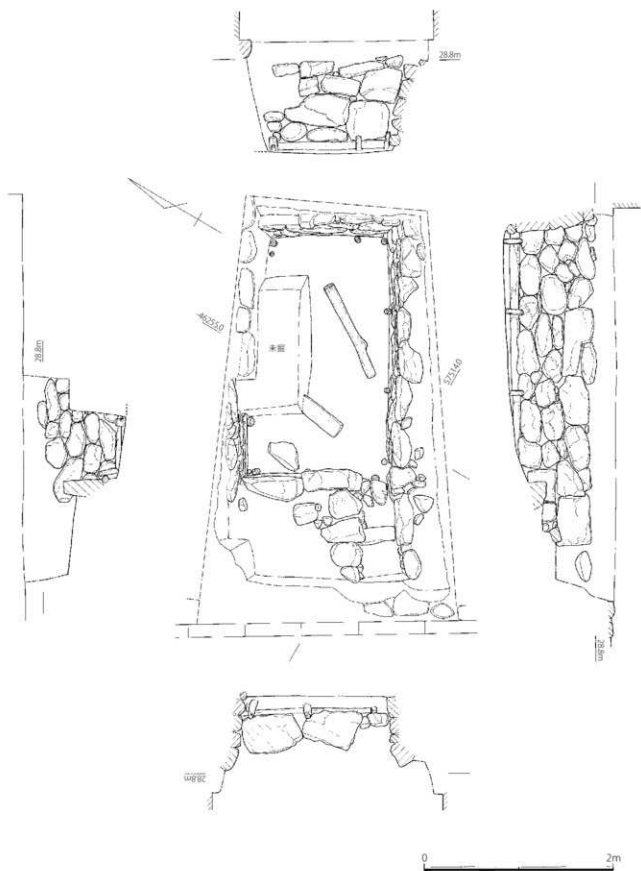


Fig. 26 姿見井遺構実測図 (1/40)

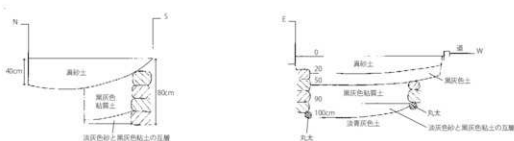


Fig. 27 姿見井埋土土層模式図

表.5 姿見井調査 出土遺物一覧表

土 師 器 例:	瓦	類 平瓦、丸瓦、楕圓瓦(平瓦)
肥前赤磁 器 例、破片	石 製	品 轉石
国産陶 器 土瓶、土瓶蓋、壺、七輪?、タイル、破片	そ の	他 豆炭、ビー玉、石炭、日薬瓶、ジュース瓶
弥生土 器 壺		

「姿見の池（鏡が池） また衣掛天神の鳥居の傍に、昔姿見の池があったが、これには次のような話が残っている。「菅原道真がここで衣を着替えた時、近くにあった池に姿を映して、あまりにもやつれた自分の姿を悲しみ、池の水をかき回した。すると水はたちまち濁り、その後決して澄むことがなかった。」この池は、近年埋められ、現在万葉歌碑が建てられている。」

②聞き取り

松島孝己さん（昭和4年生、国分2丁目在住、2001年3月12日聞き取り）

・水は山側から流れてきていて、きれいだった。深さは30～50cmくらいだった。形は台湾地図（楕円形）のような形で、水城側に石が並んでいたが崩れていた。戦前までは9月24日に池漕ぎをやっていたが、戦後はやらなくなった。その後、下水が入ってくるようになって汚くなり、臭くなったので、埋めてしまった。

(3) 検出遺構 (Fig. 26・27、Pla. 14・15)

井戸の規模は縦2.5m、幅1.5mの長方形で、石積みの高さは0.8m。石積みに使用された石材は花崗岩で、その大きさは殆んど0.3～0.5mで、3～4段積み上げている。その基礎には石積みの円弧滑り防止のために、径0.1mの自然木の丸太が敷かれ、それを径0.04～0.07mの自然木の杭を不規則に打ち込み留めている。井戸底から石積みの上面までは約0.9mを測る。井戸底は旧道側が最も浅く、奥側ほど徐々に深くなっており、底面の高低差は約0.25mある。底面は淡青灰色土で砂層などは確認できない。

旧道側には道端から長さ1.6m、幅1.3m程の踊り場状の平坦面が造られている。石積みは1段のみで、井戸側面の石積みより0.2m程低い。当初からこの高さであったかは明確でないが、踊り場部分の石垣全体が周囲の石積みより一段下がっている状況は偶然過ぎるため、ほぼ使用時と同じ高さであると推測される。

また、太宰府側に寄ったところに、井戸から溝状の石積みが旧道に向かって造られている。検出長は1.2m、幅0.4m程で、途中に石を並べ階段状をなし、深さは井戸の方に向かって深くなっている。井戸に近い部分で、井戸底面との段差は約0.2m、踊り場状の平坦面からは最も浅い所で0.1m程しか高低差がない。この機能については井戸への階段や水路に思える。水路とした場合、満水となった水がこの部分を通して旧道沿いの側溝に流れる仕組みだったかもしれない。井戸底には4～5個の礫、加工された方形石材、丸太が検出された。これらは埋没時に周辺から転落したものと推測されるが、方形石材については、かつて隣に石屋があり、石材が積まれていたという古老の話があることから、石屋から落下し

たものと推測される。

なお、調査直後でも僅かに湧水があったが、降雨後はさらに湧水があり、かつて井戸があった頃を彷彿させる貯水状況を見せていた。

(4) 出土遺物

出土遺物は、一覧表に記載しているとおりで、僅かに弥生土器や古代の瓦があるものの、ほとんどが近代以降のもので、ビニールも含まれるいわゆるゴミである。この近代以降の遺物は、井戸の底面近くまであり、ラムネ瓶のガラス玉も含むビー玉が11個と使用済みの豆炭が多く見られた。その中には戦時中に全国購買販売組合連合会が販売していたといわれる一口タキ点眼鏡と呼ばれる目薬瓶も出土した。

(5) 環境整備について (Fig. 28・29, Pla. 15)

整備に関して、当初計画段階では古老が語っていた円形の浅い水溜りのようなものとする予定であった。しかし、調査で予想以上に立派で良好に残る石積みが検出されたため、急遽設計を変更し、遺構に近いものを設計したのだが、やはり、本物の凄さにはかなり劣ってしまい、いかにも復元という仕上がりとってしまった。

整備については、調査成果をもとに以下のような方針で設計施工を行った。

①遺構の復元

当初は調査で確認した遺構をそのまま利用ことも考えられたが、敷地境界に近い位置に石積みが並んでいたこと、さらに時間と共に石材が若干動くような状態が確認できたこと、通学路横の敷地にしては深さがあり危険であったこと、木材が使用されており、劣化が心配されていたことなどからそのまま遺構を利用することは保存上好ましくないと判断した。

遺構の直上に同じ大きさで石積みを再現することについては、敷地境界に近くなることとその影響で周囲を囲む修景用の柵の設置にも影響があること、水城側の石積みが隣地に入り込んでいることなどにより断念した。しかし、旧道側については障害がないため、踊り場や溝状遺構は、遺構の同じような位置で再現した。それ以外の井戸の石積みは、形状を同じ長方形としたが、実際の遺構より約85%とひと回り小さく、石の積み方も遺構と全く異なる再現となっている。

②遺構に影響を与えない

遺構保護のため、井戸内の下半は砂で、上半は真砂土を入れ遺構を保護した。また、現況レベルでは石積みと外柵の基礎が遺構に当たるため、遺構最上面より真砂土を30cm以上盛土した。

③井戸には水を溜めない

このことについては、過去ドブ池のようになって、荒地になり埋められたという経緯を考慮したものである。ただ、姿を映した井戸という伝説があることから、何らかの形で、それを見学者に体感できないかということで、水鉢を埋めて、雨水が溜まった時だけ見学者が自分の姿が映せるという演出を取り入れた。その他は水に近い感じを出すように水色の玉石を敷き詰めた。

④姿見井の存在を明確にする

説明板と標柱を設置することとした。現場の間口が2.8mと狭いことから、気付かないまま通り過ぎてしまうことがあるため、説明板と標柱の位置は、間口の両側に配し、見過ごしてしまうことを少しでも軽減できるように試みた。

⑤ブロック塀に囲まれている景観の改善

ブロック塀の改修について、所有者と検討したが、基本的に現況のまままで改修はしないこととなったため、井戸側に目隠しのものを設置することで検討することとなった。植栽について敷地が狭いこと

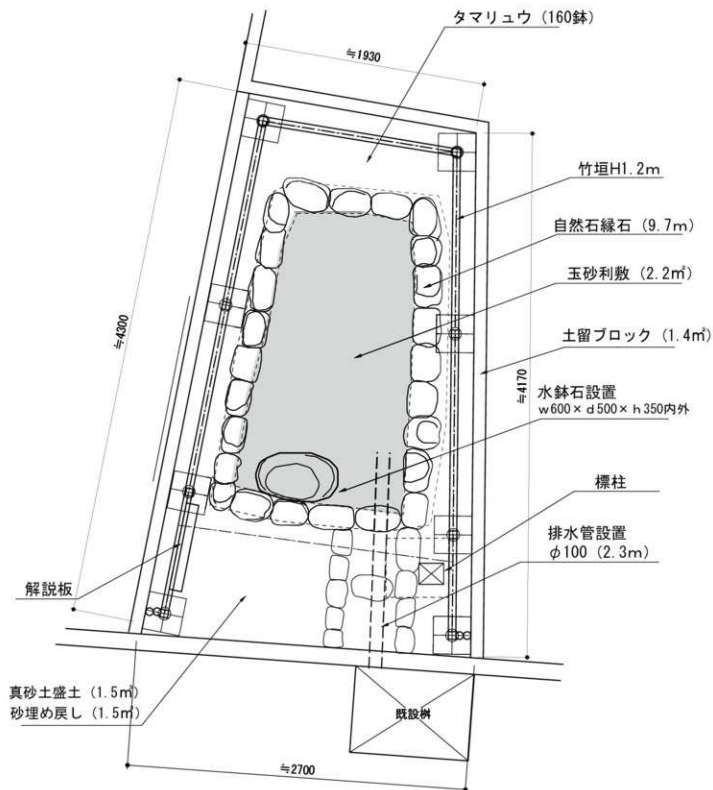


Fig. 28 姿見井修景整備設計平面図 (1/30)

5. 変見井の調査

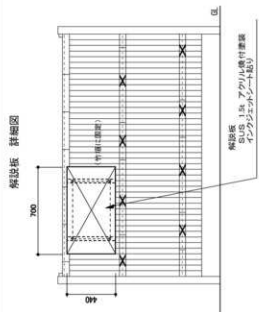
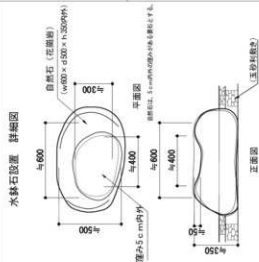
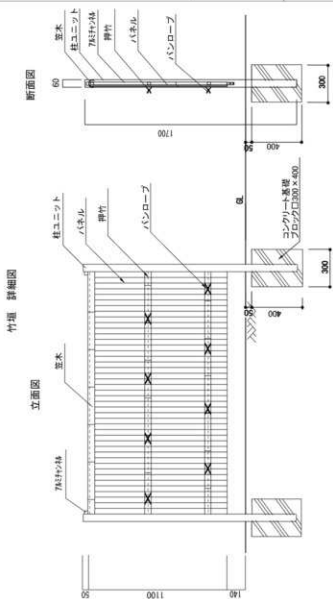
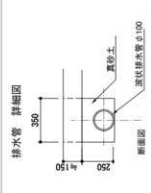
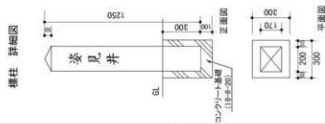
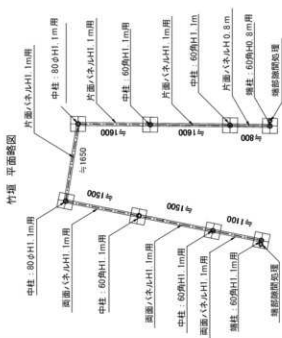


Fig. 29 変見井修景整備設計詳細図 (1/30)

と維持管理が継続的に続くことから断念し、塀のようなものを設置することで検討した。板塀については、腐食すること、色合ひ的に窮屈感が出る可能性が考えられたこと、窮屈感を解消すべく隙間を開ければブロック塀が見えてしまうことが予想されたため断念した。そこで井戸の再現状況が坪庭風になることが予想されたため、竹垣を行うこととした。竹は腐食を防ぐためプラスチック製のものをを用いることとした。

(6) 小結

姿見井については、文献に記載されている内容を見ると『筑前国続風土記拾遺』には「5尺四方」、『福岡縣地理全誌』には「径5尺」と書かれている。この記述をそのまま解釈するなら、江戸後期に方形だった井戸は、約50年間で土砂堆積が進み、明治初期には「濁水」と表現されているような状態になり、円形状の井戸となっていたと推測される。これは楕円形のような形状だったという証言を想像させる。今回検出した石積みは、裏込めなどが未調査であるため、井戸の築造年代は不明である。しかし、その大きさがおおよそ8尺×5尺であり、井戸の大きさ・形状は『筑前国続風土記拾遺』に近い。つまり、検出された石積みはこれに記載された井戸である可能性が高い。

6、現存する水城跡の礎石について

(1) 礎石に関する経緯

現在水城の門礎と言われている礎石は、最新の報告書（九州歴史資料館『水城跡』2009年）で7個が紹介されている。これらの礎石が遺物として掲載されている文献等を取り上げ、発見状況や掲載当時の礎石の状況について一部抜粋し、現在に至る経緯を簡単にまとめておきたい。詳細については、各文献を参照して頂きたい。

1、水城東門礎石（太宰府市国分2丁目195-1所在）(Pl.16)

・18世紀初期 貝原益軒『筑前国続風土記』

「其東の大路のすちに、門の礎一ツ残り、大なる礎猶残れり。・・・水城の大堤の東の山きはに關の跡あり。大なる礎石などあり。」

・19世紀前半 奥村玉蘭『筑前名所図会』

「其の方大路の傍らに、門の礎一ツ残り、是を俗に鬼の礎石といふ。」

・明治24(1891)年 山田安榮「靖方溯源」

水城東門の礎石として図入りで紹介されている。その図は現在の東門の礎石であることが一見してわかるものである。

・大正3(1914)年 中山平次郎「水城の研究」『筑前史談会講演集第1集』

「丸山下の閘門の礎石は従前唯一個のみが遺存し他側のものは永く行衛不明となっていた処、・・・尚現今丸山下の道の傍に遺存している門柱の礎石が、昔乍らの位置を保ったものと仮定すると、石面に存する柱及び扉の受穴の位置より推定して、閘門の扉は外開きになっていたと思わねばならぬ。」

・大正6(1917)年9月 武谷水城「水城大堤の長さ高さ」『筑紫史談第14集』

「従来片礎のみにて、他は長く所在を失せしが、・・・」

・大正11(1922)年

礎石の横の史跡指定の標柱が建てられる。

・昭和5(1930)年4月 武谷水城「水城史観(上)」『筑紫史談第49集』

「水城東閘門の址には、今門扉の一礎石遺存し、俚俗之れを礎石と稱す、」

・昭和5(1930)年 武谷水城「水城史観(下の上)」『筑紫史談第51集』

「現存せる東閘門の礎石は、その南隣末永某の狭隘なる庭前にありて、今と聊かも変位せず。」

・昭和6(1931)年 武谷水城「水城史観(下の下)」『筑紫史談第52集』

「現今礎石の舊態の俚に現存するものとみとめらるるは、国道に沿ひたる大字国分、字上水城の北端に存在する東閘門の片礎のみににして、・・・礎石の全長七尺五寸、巾二尺九寸、横形方孔長七寸五分、幅三寸五分、深一寸六分、圓孔左側(北向)に在るもの径五寸五分、深二寸八分、右側にあるもの径五寸、深二寸四分・・・」

武谷水城(1852～1939)は70余年前(江戸末期)の幼い時、既にこれだけになっていて、片方の所在もわからなかったと記述している。

・昭和43(1968)年 鏡山猛『太宰府都城の研究』

「旧国道のわきに水平に据えられている。・・・」

・昭和54(1979)年 福岡県教委『水城跡 昭和51・52・53年度の発掘調査概報と史跡環境整備事業実施概要』

「現在東門推定地には門礎1個が保存されている。動不動については明確でないが、・・・」

東門推定地内（筑紫郡太宰府町大字国分字衣掛）

- ・平成4(1992)年 太宰府市『太宰府市史 考古資料編』
「東門跡は現在国道三号線の位置に当たっており、ここにも門礎が一個残っている。・・・」
- ・平成18(2006)年 水城跡第41次調査
太宰府市教委文化財課が礎石脇を調査。近世の掘乱層の上に礎石がのっていることが判明。
- ・平成21(2009)年 九州歴史資料館『水城跡』
「太宰府市大字国分字衣掛に存在する門礎石で、・・・。石材は花崗岩で、長方形を呈し、長さ225cm、幅90cmを測る。柱座側が僅かに高くなっており、その中央に径18cm、深さ9cmの枘穴を穿ている。枘穴から37cmの間隔を置いて、長さ26cm、幅13cm、深さ8cmの隅丸長方形の方立穴があり、その斜め上に径15cm、深さ8cmの門扉軸受穴が穿たれている。枘穴の中心から方立穴端まで46cmを測ることから直径90cmほどの柱が立つことになる。」

<平成28(2016)年の現状>

現在も旧日田街道沿いに所在する。周辺は住宅の移転等で風景は変わっているが、上記の地誌に記述されている当時からほぼ位置は変わっていないものと考えられる。しかし、方立や軸枘穴などの位置から礎石は180度回転していることが理解できる。また、第41次調査の結果から礎石が近世の掘乱上にあることがわかった。今年度より東門跡一帯の整備が始まるが、現在この礎石は現状変更を予定していない。

礎石に関する寸法は九州歴史資料館報告のとおりである。花崗岩の礎石上面には明らかに磨れている部分がある。製作時や使用時のものでもあろうが、他の礎石にはないほど石材の粒子が研磨されており、長年街道沿いに露天されていたため、擦り減った結果と推測される。軸枘穴の底面が僅かに窪み状になる。門柱のホゾ穴は径16～18cmときれいな円形ではなく、底面や側面に僅かに凸凹が残る。

2. 児島氏所蔵礎石①（太宰府市吉松3丁目所在）(Pl.16)

- ・明治中頃、御笠川の脇の井手に転用されているところを発見。
- ・大正3(1914)年 中山平次郎「水城の研究」『筑前史談会講演集第1集』
「先年付近の水車場に使用せられるを見出され、今は吉松の児島氏の有に帰し、庭前の手水鉢として利用せられている。」
- ・大正6(1917)年9月 武谷水城「水城大堤の長さ高さ」『筑紫史談第14集』
「偶も十餘年前脇の井手と稱する御笠川の堰改造の際、何時の頃か堰の造築用に使用せしを発見せり。（今は本村字吉松の児島某氏庭内の手水鉢に利用せられあり）」
- ・昭和5(1930)年4月 武谷水城「水城史観（上）」『筑紫史談第49集』
「前年御笠川の堰に移用せしを発見し、今は字吉松児島某の水盤に利用せられあり。」
- ・昭和6(1931)年4月 武谷水城「水城史観（下の下）」『筑紫史談第52集』
「明治の中頃御笠川の堰用に成り居たりしを発見し、字吉松児島某（卯兵衛）、之れを其の家の手水盤に使用せしを、近年亦た其の所在移動して不明なりしが、近頃大野村字白木原森山（三平）宅に在ることを知り得たれば、去る十五日松尾繁人氏（測量技師）を伴して同家を訪ひ、就いて調査せしに、（往年嘗て吉松児島氏の手水盤たりし時一見せしことあり）大凡礎石の全體を約四五分せし其の一片位と認めらるるも幸に横形方孔（溝形）及び片圓孔の大部残在す、不正形の礎片にして、長一側二尺一寸、他側二尺四寸、巾一尺二寸乃至一尺六寸、方孔長一尺〇五分、巾四寸深二寸、圓孔徑五寸深二寸、底面に銹氣侵蝕の痕あり、・・・。」

武谷水城は穴の形状と位置から東門礎のひとつと推測している。

6. 現存する水城跡の礎石について

- ・昭和43(1968)年 鏡山猛『大宰府都城の研究』

「東門の門礎と伝えているが、移されて現在、水城西門に近い吉松の児島三郎氏宅にある。これは柱座の部分が無くなった断片で、扉の軸孔と方立孔のみが残っている。・・・」

掲載されている実測図に、軸孔底に鉄錆があることが記載されている。

- ・昭和54(1979)年 福岡県教委『水城跡 昭和51・52・53年度の発掘調査概報と史跡環境整備事業実施概要』

「児島三郎氏宅庭内(筑紫郡太宰府町大字吉松字尊田)」

- ・平成4(1992)年 太宰府市『太宰府市史 考古資料編』
実測図のみ掲載。

- ・平成21(2009)年 九州歴史資料館『水城跡』

「東門から出土したとされる礎石であるが、大半が欠損し、方立穴と門扉軸受穴を残す程度である。方立穴は長方形を呈し、長さ32cm、幅12cm、深さ5cmで、軸受穴は径14cm、深さ6cmを測る。石材は花崗岩で、厚さは52cmと厚い。現在は西門側の民家の庭先に移動している。」

<平成28(2016)年の現状>

現在も児島イツ子邸内の玄関先に所在する。礎石に関する寸法は九州歴史資料館報告のとおりである。礎石には軸摺穴と方立穴が残る。軸摺穴は側面が平滑になるが、特に方立穴側が顕著である。軸摺穴底には鉄金具が厚さ1cm程残る。その断面から観察できる穴の断面形はややU字形である。方立穴は若干方形が乱れているところがあり、発見後に二次加工された可能性もある。礎石上面は丁寧に平面な加工が施されているが、方立穴短辺の延長上に丁寧な加工面とやや粗い加工面が観察できる。なお、転用されていた脇の井手は、西鉄天神大牟田線が御笠川を跨ぐ場所から70m程上流にある井堰である。

3. 児島氏所蔵礎石②(太宰府市吉松3丁目所在)(Pl.16)

- ・昭和6(1931)年4月 武谷水城「水城史観(下の下)」『筑紫史談第52集』

「西關門址より出土せる門礎(何れも全形を存せず)二片あり、其の一は字吉松児島氏(三郎)の庭にあり、門礎の約半部と認めらる、形不正にして現存部の一側に於いて長五尺三寸、中央部四尺六寸、巾三尺五寸、方孔(溝)半ば缺損す、残部中央に於いて一尺三寸五分、巾七寸深四寸、其の横側の丁字形を為して長約一尺一寸、深約一寸の浅溝あり、其一側に大圓孔の残缺一部を存す、・・・。水城關門址村道横側の断面より出土せしものにして(第二圖のものと同所なり。)」

武谷水城は他に比べ、ひと回り大きいため西門中央の礎石と推測している。

- ・昭和43(1968)年 鏡山猛『大宰府都城の研究』

「児島三郎氏邸内に移されているものである。・・・」

- ・昭和54(1979)年 福岡県教委『水城跡 昭和51・52・53年度の発掘調査概報と史跡環境整備事業実施概要』

「児島三郎氏宅庭内(筑紫郡太宰府町大字吉松字尊田)」

- ・平成4(1992)年 太宰府市『太宰府市史 考古資料編』
実測図のみ掲載。

- ・平成21(2009)年 九州歴史資料館『水城跡』

「円形柱剝込を有する礎石であるが、門扉軸受穴は欠損する。残存長146cm、幅113cmで、剝込から復原した径は58cmと推測される。方立穴は長方形を呈し、長さ31cm、残存幅10cm、深さ7cmを測る。また、礎石上面中央には残存長48cm、幅23cm、深さ10cmを測る長方形の穴を穿っており、これを方立穴とみるならば礎石形式の門礎に作り替えたことになる。」

<平成28(2016)年の現状>

現在も児島イヅ子邸内の庭園内に所在する。礎石に関する寸法は九州歴史資料館報告のとおりである。礎石の上面は、方形穴横上面が僅かに加工されたようにみえる以外、明確な加工痕は観察できない。門柱が嵌る円弧と方形穴は2ヶ所ある。門柱の円弧に接する方形穴は構造と大きさから方立穴とみられる。もうひとつは欠損するが、残存長49cm、幅23cmあり、他の方立穴より大きいことから、地覆を嵌る穴とも考えられ、この礎石は転用された可能性も考えられる。

4. 新家氏所蔵礎石（太宰府市観世音寺5丁目所在）(Pl.17)

- ・昭和5(1930)年3月、水城西門跡の村道横側の断面より発見
- ・昭和5(1930)年4月 武谷水城「水城史観（上）」『筑紫史談第49集』
「前月偶々舊村道隧道の一部を擴鑿せしに、大なる一の敷石を發掘せり、一方の石面に、門柱及び扉の受孔あること、東關門現存のものと同じ、・・・」
- ・昭和6(1931)年4月 武谷水城「水城史観（下の下）」『筑紫史談第52集』
「次は最近昭和五年（三月）、水城村大字吉松屋ヶ浦、水城西關門址村道横側の断面より出土せしものにして（第二圖のもの出土同所なり。）著者は出土後間も無く發見者吉松百田氏（積次郎）に邂逅して之を知り、就ひては一見せり、・・・。残存部長五尺巾二尺七寸、横形方孔長七寸五分、巾三寸五分、深一寸八分、圓孔徑五寸深三寸、他は缺損す、・・・。」
- ・昭和43(1968)年 鏡山猛『大宰府都城の研究』
「もと大宰府町観世の河内卯兵衛氏邸内にはこぼれたものであるが、西門趾にあったものと伝える（児島三郎氏談）。河内氏は故人となり、現在の所有者は新家忠男氏である。方立と軸孔を持つもので、円孔、方立の大きさは図示した程度で、片側に掘立柱のつく円弧のくり込みがある。」
- ・昭和54(1979)年 福岡県教委『水城跡 昭和51・52・53年度の発掘調査概報と史跡環境整備事業実施概要』
「新家忠男氏宅庭内（筑紫郡太宰府町大字太宰府字横岳）東門で使用されたと考えられる。」
- ・平成4(1992)年 太宰府市『太宰府市史 考古資料編』
「門礎は近くの民家の庭に移されている。・・・」
当時からこの礎石は新家邸にあり、「近くの民家に」というのは明らかな誤記である。

・平成21(2009)年 九州歴史資料館『水城跡』

「西門から発見されたと考えられる礎石で、大半を欠損し、方立穴と門扉軸受穴を残す程度である。方立穴は長方形を呈し、長さ24cm、幅12cm、深さ6cmで、軸受穴は径16cm、深さ9cmを測る。また、方立穴の周囲は周りより3cm程高く、方立の座面と考えられ、20×40cmの方立が復原される。」

<平成28(2016)年の現状>

現在も新家忠政邸内の玄関前に置かれている。新家邸の前所有者は、昭和13年に福岡市長を務めた実業家である河内卯兵衛である。礎石は河内氏所有の頃に持ち込まれたものとみられ、新家氏も自邸にある経緯は不明とのことである。礎石に関する寸法は九州歴史資料館報告のとおりである。礎石上面は平坦であるが、側面に加工痕は確認できず、鏡山猛氏の記述にある円弧のくり込みについては疑問が残る。軸摺穴の側面の一部に僅かな段がある。軸摺穴上面からは幅6cm、深さ1cmの浅い溝が彫られているが、実測図に見るようなくっきりとした溝ではない。

5. 水城東門跡出土礎石（太宰府市坂本3丁目 太宰府市坂本事務所保管）(Pl.17)

- ・昭和43(1968)年11月、水城東門跡で発見。
- ・昭和53(1978)年 福岡県教委『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXVI』

6. 現存する水城跡の礎石について

昭和43年度の福岡市水道工事の立会調査で、管理設のための溝を掘削中のパワーシャベルが引っかけた円座のある礎石が出現し、昭和43年11月27・28日に調査を行った。

この報告時点では太宰府町役場に保管されている。

・平成21(2009)年 九州歴史資料館『水城跡』

「1969年11月27日、福岡市水道局による水道管理設工事の際、円形柱座を有する礎石が発見された。・・・。残存長134cm、幅92cm、厚さ25cmの扁平な花崗岩を用いている。当礎石は高さ2～4cm、上面径73cmの平滑な円形柱座を作り出すが、・・・。」

〈平成28(2016)年の現状〉

発見後太宰府町役場に置かれ、太宰府市役所庁舎新築にあたりエントランスに設置整備されていた。平成26年庁舎前庭の再整備が行われることとなり礎石を撤去、平成27年度から水城東門跡一帯で行われる環境整備で有効活用するため、この報告書作成時は太宰府市坂本文化財事務所で保管中である。礎石に関する寸法は九州歴史資料館報告のとおりである。

なお、九州歴史資料館の報告書作成時の調査で、発見は1968年ではなく1969年と判明したという。

6. 森永氏所蔵礎石（太宰府市吉松3丁目所在）(Pl. 17)

・平成7(1995)年6月29日、森永邸の石垣に転用されているのを発見。

九州歴史資料館が西門跡で行っていた第26次調査中に、同職員の杉原敏之氏が石垣に転用されている礎石を発見したものである。

・平成21(2009)年 九州歴史資料館『水城跡』

「切通し部南西側にある民家の石垣に転用されている礎石で、大半を欠損し、方立穴が見られる程度である。残存長57cm、幅79cm、厚さ17cmを測る。方立穴は長方形を呈し、残存長21cm、幅17cm、深さ3.5cmを測る。」

〈平成28(2016)年の現状〉

発見当時と同じく森永芳生邸の石垣の中に見ることができる。礎石に関する寸法は九州歴史資料館報告のとおりである。

昭和26年頃、森永氏がこの土地を購入した時点で、この石垣はすでにあったということで、礎石の経緯については全く知らないとのことである。

7. 水城西門跡横の大石（太宰府市吉松2丁目182-2所在）(Pl. 17)

・大正3(1914)年 中山平次郎「水城の研究」『筑前史談会講演集第1集』

「西門の址には礎石も巖然として有（此礎石と称するものは長さ一間許、幅四五尺厚さ、一尺内外、柱穴の有無未詳の大石であって、今吉松の小川に架けられた石橋となっている。此事も高原児島両氏の好意によって識るを得た）」

・大正6(1917)年9月 武谷水城「水城大堤の長さ高さ」『筑紫史談第14集』

「近年に至り、吉松境内の小川に架せられて、石橋と為り居る事を発見せり。見る處礎石の表面を下向して架せるを以て、其礎面を見ること能はず。」

・昭和5(1930)年4月 武谷水城「水城史観(上)」『筑紫史談第49集』

「又た前年其の礎石の一と認めらるるもの、附近小川の石橋に利用せるを発見せり。」

・昭和54(1979)年 福岡県教委『水城跡 昭和51・52・53年度の発掘調査概報と史跡環境整備事業実施概要』

「百田新吾氏宅庭内（筑紫郡太宰府町大字吉松字神ノ前）」

「今回、さらに未紹介であった1個を追加し、再録した。」

これが武谷水城の論文以後初めて紹介された報告書である。なお、昭和43年の鏡山猛氏の『大宰府都城の研究』にも登場しない。

これが掲載されるに至った経緯を当時報告書作成にかかわった元九州歴史資料館技師である高橋章氏（現求菩提資料館館長、2015年12月3日聞き取り）に当時の事情を伺うことができた。

「水城跡が福岡県により発掘調査が行われるようになった頃、宅地内にあるこの礎石の存在が福岡県の文化財職員に知られることとなっていた。報告書に掲載したいと考えていたが、なかなかその機会がなくて1979年に報告書を作成する機会があったので、実測図と共に礎石として掲載した。当時礎石に対し若干の違和感があったが、発掘調査に追われる中、それを追求するまでには至らなかった。」

- ・平成4(1992)年 太宰府市『太宰府市史 考古資料編』

実測図のみ掲載。

- ・平成5(1993)年

百田邸に無断侵入し礎石を見学する人がいるということで、太宰府市文化課が百田邸内から邸前の下成土塁上に移設。

- ・平成21(2009)年 九州歴史資料館『水城跡』

「西門から掘り出されたとされる礎石であるが、現在は西門切通し部南東側の基底部に安置されている。完形品で、長さ235cm、先端幅44cm、基部幅122cm、基部の厚さ44cmを測る。柱座は造り出されていないが、方立穴は長方形を呈し、長さ34cm、幅11cm、深さ6cmで、軸受穴は径11cm、深さ6cmを測る。・・・」

<平成28(2016)年の現状>

現在も西門跡近くの下成土塁上に置いており、史跡めぐりなどでは、西門の礎石として紹介されている。大石に関する寸法は九州歴史資料館報告のとおりであるが、この大石については後述のような問題がある。

(2) 水城西門跡横の大石について

上述した7個の礎石のうち、西門跡近くの下成土塁上に置いている大石も、円形穴と方形穴が彫り込まれていることから、他の礎石同様に水城西門礎石として紹介されてきた。しかし、これを礎石とするには様々な問題がある。この報告書作成時に得られた聞き取りや所見について記録し、今後の課題としておきたい。

①古代の門礎との比較

まず、大石と現在観察できる近隣の古代の門礎と簡単ではあるが比較してみた。古代の門礎については、大石と同じく円形穴と方形穴が彫られているもの（唐居敷）を観察した。比較検討した資料は、水城跡に関係する門礎5個、大野城跡の門礎6個（太宰府口、坂本口・水城口、宇美口、クロガネ岩城門）、鞠智城の門礎3個（深泊門・堀切門・池の尾門）である。

これらに彫られている軸摺穴や方立穴を中心に礎石全体にみられる共通点と相違点は以下の通りである。

(古代門礎の共通点)

- ・穴の内側側面は、敲打もしくは使用により平滑となる。
- ・表面と穴の境目は90度の直角ではなく、丸味を帯びている。
- ・穴側面と底面の境目は、90度の直角ではなく、丸味を帯びている。
- ・穴底は平坦ではなく、僅かに凹面をなし、やや平滑である。

6. 現存する水城跡の礎石について

- ・礎石上面は平坦で、部分的に表面が加工されている。
- ・門柱設置部分には、側面の場合は円形削り込み、上面の場合ホゾ穴が彫られている。

(古代門礎と大石との共通点)

- ・加工された穴が、円形穴と長方形穴である。
- ・花崗岩を使用している。

(古代門礎と大石との相違点)

- ・穴の内側はザラザラして、加工痕が明瞭に確認できる。
- ・方形穴の底面には、角を付けるために彫られた直線の溝が付いている。
- ・円形穴の直径が他より小さい。
- ・円形穴と方形穴共に底端は角が付き平坦で、断面が方形となる。
- ・大石の上面はもちろん、その他の面にも加工痕が全く見当たらない。
- ・大石は花崗岩特有の玉ねぎ状剥離で得られた石材が利用されているため、上面は水平でなく、高低差10cm程の緩やかなU字形をしている。円形穴と方形穴はその最も凹んだ位置に彫られている。
- ・門柱を据えるための加工や水平面が全くない。

以上のことから、この大石は現存する古代の門礎と大きく異なることが理解できる。また、軸掘穴が大石の最も凹んだ部分にあるため、西門横の大石が門礎として利用されたと仮定した場合、門扉が岩石に当たり、スムーズな開閉ができない。古代山城に限らず、古代の官衙や神社でもこのような門礎を知り得ない。

②中山平次郎や武谷水城が見た大石について

大石については、大正の頃、中山平次郎が八反川に架かる柱穴の有無未詳の大石と記述し、これを地元の高原・児島両氏は、西門の礎石として中山平次郎に紹介されている。このことから、当時地元の人々でさえ大石のどこに穴の加工があるか説明できない、知らない状況であったことがわかる。しかし、大石が西門跡から持って来られたものという話が地元に残っていたということである。

また、大正6年には武谷水城が実見し、礎石の表面を下向きに架しているのが、礎石面を見ることが出来ないと記述している。西門テラス上の大石に施されている2つの穴の加工は大石のほぼ中央であることから、もし両氏が実見した時点でその加工があり、八反川に普通に架けられていたならば、覗き込めばその加工は観察できたであろうし、地元の方々も確認していただろう。しかし、誰も確認していないということは、兩岸に架けられている見えない部分に加工があるかもしれないと考えたかもしれない。また、後述するとおり、聞き取りで沈下橋のような石橋だったらしいという話を得ることができた。このことから推測すると、大石は、その下を潜り抜けることも、裏面を覗くことも、腕を伸ばし探しても全容が掴めないほど、水面ギリギリに架けられていた可能性もあり、見ようと思っても見る事ができない、つまり、武谷水城が“見ることははず”と記述した状況を想像できる。

石橋の頃の大石の写真や実測図が残っていないが、中山平次郎が記述している寸法や聞き取りで得られた「聞いた話」から、両氏が実見した石橋に転用されていた大石は、現在西門跡近くにある大石とみて間違いないであろう。

③聞き取り

地元吉松在住の住民を中心に聞き取りを行った。昔のことゆえに記憶にない、もしくは記憶があいまいな方が多い。の中で以下の5人から礎石に関して貴重な証言を得られた。

【井上重利さん（昭和2年生、吉松在住、2015年12月19日聞き取り）】

- ・昔は水城の切通しの上に三角形のような平坦面があって、その周りにも石が置いてあった。

- ・子どもの頃、石の上でヨモギなどを播って遊んだり、石の下にも潜っていたが、穴があった印象はない。
 - ・むかし八反川には石橋が架かっていた。石橋はかずら石の倍くらいの幅 50cm 程の石が並べてあり、四隅に石が立ててあった。石橋の下を潜ったりしていた。川幅は今より狭く、飛び降りられるくらい深かった。石橋の下を潜ったりしていた。それ以前の石橋や礎石が使われていた記憶はない。
- 【児島貞金さん（昭和5年生、吉松3丁目在住、2008年11月4日聞き取り）】
- ・今土手に置いてある水城西門の礎石は、以前は西門の切通しの水城院側にあった。子供の頃は石の上で遊んでいた。穴は開いていなかった。石の下には両側に足が付いていた（石を敷いていた）。1個だけでなくいくつもあった。百田新吾さんが自宅のお坪に使うために持って行った。そのことで近所の浅川君代さんから連絡を受けたが、自分が行った時には、すでに持って行った後だったので、どのような手段で持って行ったかはわからない。戦後すぐくらいだったかな。大きな石に穴を彫って、礎石とか何とか言っていた。穴は石屋が彫った。元々礎石に穴はなかった。自分の家に持って行って穴を彫っている。
- 【百田ヤナ子さん（昭和7年生、吉松在住、2008年11月7日聞き取り）】
- ・水城のテラスに移す前は、蔵の前にあった。勝手に見知らぬ人が宅地に入るので、市に持って行ってもらった。
 - ・昭和29年に線いできた時には礎石はあった気がする。しかし、宅地内には石好きの義父の百田新吾さんが集めた石が多かったので、特別目立つものでなく明確に覚えていない。
 - ・石が好きだったのは義父の百田新吾さんだ。
 - ・礎石に穴を彫ってもらいよった気がする。もしかして、昭和38年頃に庭を整理した時かもしれない。
 - ・礎石は、八反川の入口（コーポ吉松前の十字路付近）にあったという人もいる。
- 【森永芳生さん（昭和7年生、吉松在住、2016年1月28日聞き取り）】
- ・引越してきた昭和26年頃は、礎石は水城西門の土手の上にあった。礎石に座っていた。
 - ・礎石に穴はあいていた。
 - ・礎石は、百田賢祐さんが若者5～6人以上を連れて台車に載せて運んでいった。
- 【井上昭さん（昭和11年生、吉松在住、2008年11月14日、2016年2月4日聞き取り）】
- ・西門跡には礎石はなかった。私たちが聞いたのは、八反川に広い石が架かっている、それを渡っていたという話である。それが現在百田さんの家の前の土手の上に置いてある。石にある円形の穴はあったと思う。誰もあけてはいないと思う。困りから素人があけられるものではない。祖父（正太郎）さんたちは西門の横から水城院に行く道などを造っている。あの大きな石を据えて、腰掛をこしらえていた。今水城のテラス上にひとつ置いてある礎石がテーブル代わりでした。その礎石は元々八反川の橋だったという話は聞いている。それを切り通しの所に持って行き、テーブル代わりに置いていた。それはうちの祖父（正太郎）さんや百田積次郎さんや高田文市さんたちがやっている。その礎石は百田新吾さんが西門跡から持っていき庭に置いていた。その後縁起が悪いと言って戻している。
 - ・吉松の道路は、昭和14年に大旱魃があって、その飢饉の雇用対策事業として杉塚から下大利までの道路整備が行われたと聞いている。
 - ・八反川には、川岸から少し下がった川幅1mちょっとの所に大石が架けてあって、大雨が降ったらその上を水が流れるという沈下橋のような感じだったと聞いている。昭和14年の道路工事の時に架け変わっているかもしれない。

<聞き取りのまとめ>

上述した証言でもわかるように、穴の有無については、記憶が分かれている。この方々以外にも数人に聞き取りを行ったが、同様に証言は分かれ、記憶も曖昧であった。

これらの証言等を繋ぎ合わせ簡単にまとめると、この大石には次のような経緯があったと推測される。

「水城西門礎石といわれる大石が、吉松の十字路横の八反川に架かる石橋として利用されていた。昭和14年(7年?)に道路工事で、架橋部分も改修されたとみられ、不要となったと推測される大石を吉松在住の井上正太郎氏・百田積次郎氏・高田文市氏らが西門跡の切り通し西側(当時百田氏所有地)に持って行った。西門跡では、石を並べその上にこの大石を据えて、テーブルのようにし、周囲には腰掛用の石も置いた。このようにしたのは、水城院の入口に位置するためとみられる。戦後になり(昭和20年代後半～30年代後半)、吉松在住の百田氏が庭石に使うために西門跡から自邸に運んだ。穴が現代の製作ならこの時期に彫られたと推測される。水城跡が福岡県により発掘調査が行われるようになった昭和40年代後半頃、百田邸内にある円形穴と方形穴があるこの大石の存在が福岡県の文化財職員に知られることとなり、昭和54年水城跡の報告書に礎石として掲載され、一般的に知られるようになる。その後見学者が無断で百田邸内に進入するようになったため、百田氏は太宰府市に相談、平成5年に太宰府市文化課が百田邸前の下成土塁上に移設し、現在に至っている。」

④まとめ

以上のことから、現在この大石の問題点で言えることは以下の通りである。

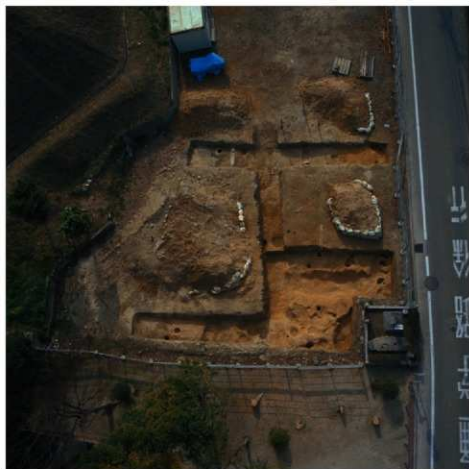
- ・大正の頃には、西門に関係した礎石(もしくは石畳や石垣の石材か)と地元へ伝わっていた。
- ・大正の頃、地元の人々は穴の有無について知らない。
- ・円形穴や方形穴が、古代のものではない可能性がある。
- ・円形穴や方形穴が、戦後の製作である可能性がある。

この大石の移動等に直接関わった人々は故人となり、証言を得ることはできないため、確定的とは言えない。しかし、現在真贋について意見が分かれる大石であることは間違いのない事実である。今後も聞き取りを継続し、また、さらなる調査研究により、この大石の意味がわかっていくことを望みたい。

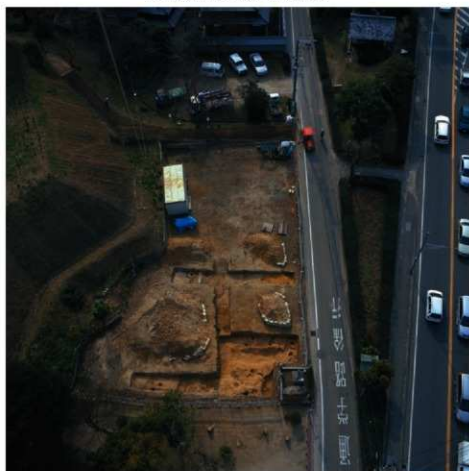
参考文献

- 貝原益軒『筑前国統風土記』18世紀初期
- 奥村玉蘭『筑前名所図会』19世紀前半
- 山田安榮『靖方溯源』明治24年
- 武谷水城「水城大堤の長さ高さ」『筑紫史談第14集』大正6年
- 武谷水城「水城史観(上)」『筑紫史談第49集』昭和5年
- 武谷水城「水城史観(下の上)」『筑紫史談第51集』昭和5年
- 武谷水城「水城史観(下の下)」『筑紫史談第52集』昭和6年
- 鐘山猛『大宰府都城の研究』昭和43年
- 福岡県教委『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXVI』昭和53年
- 太宰府市『太宰府市史 考古資料編』平成4年
- 九州歴史資料館『水城跡 上巻』平成21年

写真図版



第41次調査区全景（下が北西）



第41次調査区遠景（下が北西）



第41次調査 1トレンチ北壁土層状況（南西から）



第41次調査 1・2トレンチ完掘状況（北東から）



第41次調査 3トレンチ完掘状況（南東から）



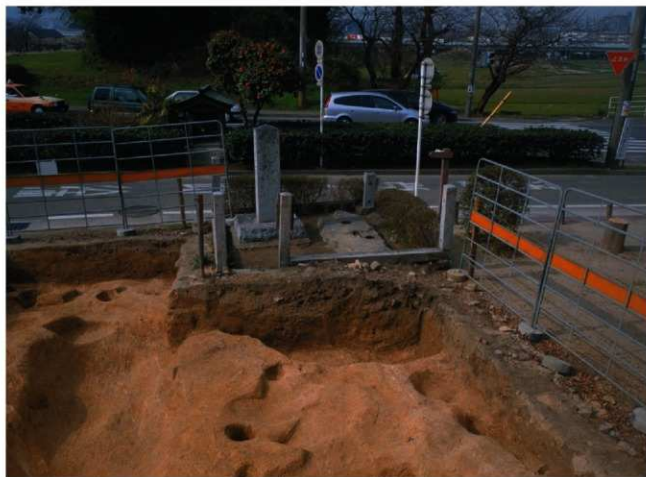
第41次調査 4トレンチ完掘状況（北東から）



第41次調査 5トレンチ完掘状況（北東から）



41SK022 南壁土層状況（北西から）



水城東門礎石と 41SK022 (北東から)



41SX033 埋め甕状況 (南から)



第42次調査A区 土層とトレンチ底面状況（北から）



第42次調査A区 土層状況（北東から）



第42次調査B区 完掘状況（北東から）



第42次調査D区 全景（北から）



第42次調査E区 全景（西から）



第 42 次調査 C 区 全景 (東から)



第 42 次調査 C 区 土層状況 (東から)



第48次調査1トレンチ状況（北西から）



第48次調査1トレンチ 土層観察（北から）



第48次調査2トレンチ状況（北西から）



第48次調査2トレンチ 南壁土層観察（北から）



第48次調査2トレンチ 設定状況（東から）



第48次調査3トレンチ 土層観察（東から）



第48次調査4トレンチ 土層状況（北東から）



第48次調査4トレンチ状況（北東から）



第49次調査前の状況（南から）



第49次調査B区 土層ベルト除去後土層状況（南東から）



第49次調査B区 土層状況東半分（南東から）



第49次調査B区 土層状況西半分（南東から）



第 49 次調査 B 区 土層ベルト除去後土層状況（南東から）



第 49 次調査 B 区 土層状況（南西から）



第49次調査A区 土層状況（南東から）



第49次調査A区 東壁土層状況（南西から）



姿見井検出状況（南西から）



姿見井南側石積み
状況（北から）



姿見井 踊り場・
溝状遺構検出状況
（北東から）



姿見井修景整備
完成状況
（南西から）



1、東門礎石全景（南東から）



1、東門礎石の軸措穴と方立穴



1、東門礎石の軸措穴



2、児島氏所蔵礎石①



2、児島氏所蔵礎石①の軸措穴



2、児島氏所蔵礎石①の軸措穴と方立穴



3、児島氏所蔵礎石②全景



3、児島氏所蔵礎石② 方立穴と門柱削り込み加工



4、新家氏所蔵礎石全景



4、新家氏所蔵礎石の軸摺穴と方形穴



5、水城東門跡出土礎石全景



6、森永氏所蔵礎石全景



7、水城西門横の大石全景



7、水城西門横の大石の円形穴と方形穴



7、水城西門横の大石の円形穴



7、水城西門横の大石の方形穴細部



41SK022 出土遺物 (Fig. 8)



41SK041 出土遺物 (Fig. 8)



41SK042 出土遺物 (Fig. 8)



41SD026 出土遺物 (Fig. 9)



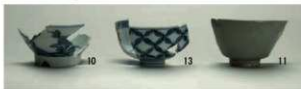
41SD032・039 出土遺物 (Fig. 9)



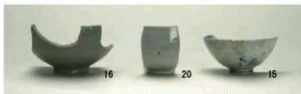
41SX008・011・017 出土遺物 (Fig. 10)



41SX014 出土土師質土器甕 (Fig. 10-6)



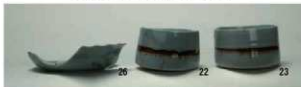
41SX031 出土遺物 (Fig. 11)



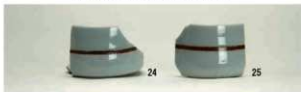
41SX031 出土遺物 (Fig. 11)



41SX031 出土遺物 (Fig. 11)



41SX031 出土遺物 (Fig. 12)



41SX031 出土遺物 (Fig. 12)



41SX019 出土遺物 (Fig. 11)



41SX024・031 出土遺物 (Fig. 11)



41SX031 出土遺物 (Fig. 12)



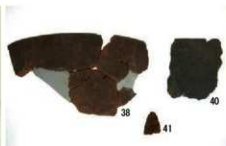
41SX031 出土国産陶器土瓶 (Fig. 12)



41SX031 出土土師質土器鉢 (Fig. 12)



41SX031 出土土師質土器鉢 (Fig. 12)



41SX031 出土遺物 (Fig. 13)



41SX031 出土瓦質土器火鉢 (Fig. 13)



41SX033 出土瓦質土器大甕 (Fig. 13)



41SX035・036・茶灰色土・茶色土・
橙茶色土出土遺物 (Fig. 13)



第 41 次調査 橙茶色土
出土遺物 (Fig. 14)



第 41 次調査 橙茶色土
出土遺物 (Fig. 14)



第 41 次調査 1 トレンチ表土
出土遺物 (Fig. 15)



第 41 次調査 2 トレンチ表土
出土遺物 (Fig. 15)

報告書抄録

ふりがな	みずきあと										
書名	水城跡3										
副書名	第41・42・48・49次・姿見井の調査										
シリーズ名	太宰府市の文化財										
シリーズ番号	129集										
編著者	宮崎亮一・山村信英										
編集機関	太宰府市教育委員会										
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号										
発行年月日	2016（平成28）年3月31日										
ふりがな 所収遺跡名	条坊 【龍山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因	
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了			
みずきあと 水城跡 第41次	条坊外	こくぶ 園分2丁目	402214	210050	56625.0	-46340.0	20060215	20060317	72.2	史跡整備	
みずきあと 水城跡 第42次	条坊外	よしまつ 吉松	402214	210050	56945.0	-47239.0	20070823	20070827	25	災害復旧工事	
みずきあと 水城跡 第48次	条坊外	よしまつ 吉松1丁目	402214	210050	57380.0	-47110.0	20090611	20100312	37.306	市道建設	
みずきあと 水城跡 第49次	条坊外	こくぶ 園分1丁目	402214	210050	57430.0	-46505.0	20090909	20100331	62	史跡整備	
すがたみのい 姿見井調査	条坊外	こくぶ 園分2丁目	402214		57515.0	-46255.0	20111125	20111128	10.4	環境整備	
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項				
水城跡 第41次	城跡	飛鳥、近世	積土、土坑、埋築		瓦、土師質土器、肥前系陶磁器						
水城跡 第42次	城跡	飛鳥	積土		土師器、瓦						
水城跡 第48次	城跡		遺構なし		遺物なし						
水城跡 第49次	城跡	飛鳥	積土		瓦、弥生土器、近世陶磁						
姿見井	集落	近世	井戸		ビー玉						

太宰府市の文化財 第129集

水城跡 3

-水城跡第41・42・48・49次・姿見井の調査-

平成28（2016）年3月

編集 太宰府市教育委員会

発行 太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 株式会社 四ヶ所